
玉霊殿日和

みどり風香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玉霊殿日和

【Nコード】

N7802V

【作者名】

みどり風香

【あらすじ】

「楽園」に、「玉霊殿」という古びた洋館が突然現れた。「楽園」の住人達はそれぞれ「玉霊殿」の出現に思い思いの行動を始める。さほど気にしていない管理人、危機感を抱き他人を仕向けた天子、情報を得んとする船乗り、そして興味本位で訪れる軍人。一方、俳聖は失踪した弟子を探していた――

登場人物たち（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラクターたちを『東方』の世界に組み込んだパロディ小説です。閲覧の際はご注意ください。

登場人物たち

・登場人物

コンテー …… 普通の海軍軍人。銃器と魔法を使う程度の能力を持つ。人の心を読むという妖怪に興味を持ち、玉霊殿に訪れる。

ヒュースケン …… 怨霊も恐れ怯む青年。心を読む程度の能力を持つ。地上に突如建てられた玉霊殿の主人。

曾良 …… 断罪の輪禍。愛称は「お空」。断罪をする程度の能力を持つ。ヒュースケンのペット。

松尾芭蕉 …… 芭蕉楼閣の俳聖翁。言霊を操る程度の能力を持つ。数年前失踪した弟子を探している。

聖徳太子 …… 日出国の天子。祖国を操る程度の能力を持つ。玉霊殿の登場にただならぬ気配を察知し、コンテーを仕向ける。

小野妹子 …… 日出国の人の形。負けることも戦いをやめることもない程度の能力を持つ。太子に仕える忠実な駒。

閻魔大王 …… 封印された大閻王。術（主に身体能力を上げる術を得意とする）を使う程度の能力を持つ。芭蕉とは旧知の仲で、彼の弟子搜索に尽力している。

鬼男 …… 閻王に使わされる鬼の子。奇跡（ただし自分の身体にのみ限られる）を起こす程度の能力を持つ。閻魔大王に頼まれ玉霊殿を襲撃したが返り討ちにされた。

ベル …… 地殻の下の卑屈心。卑屈心を操る程度の能力を持つ。玉霊殿近くに住みつき、人の目から隠れるように生きている。

ワトソン …… 超電気工弾頭。電気を操る程度の能力を持つ。隠れ

た技術を持ったベルに興味を持ち、たびたび彼のもとへ遊びに行く。

コロンブス …… 新大陸発見の船長。大陸を発見する程度の能力を持つ。あらゆる世界へ航海しており、世界事情に一番詳しい。

平田平男 …… 守り守られし拳法家。ウツヒヨヒヨイ拳を操る程度の能力を持つ。突如現れた玉霊殿に危機感を抱き襲撃するも、曽良に返り討ちにされた。

増田こうすけ …… 楽園の素敵な管理人。世界を見渡す程度の能力を持つ。玉霊殿の主人であるヒュースケンには興味を抱いているが、玉霊殿自体にはそれほど頓着していない。

フォーエバーハンター MASUDA …… 楽園のハンター。境界を操る程度の能力を持つ。楽園の最古参でこうすけにいろいろと指南していたりするらしい。

登場人物たち（後書き）

ついにやっちゃったんだぜ。東方パロは元もと考えていたネタですが、オリジナルの連載が終わったので次はこっちに力を入れるつもりです。長らくお付き合いくださいませ。

序・それぞれの行動記録（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラ達を『東方』の世界に組み込んだパロディです。閲覧の際はご注意ください。

序・それぞれの行動記録

本当の序

「こいつは化け物だ」

目の前の青年は、微笑んで僕に言葉を突き刺した。なぜ、という疑問が心を支配する。僕は何も言わず、ただ立ち尽くすだけ。

「今、そう思ったんでしよう？」

相変わらず、彼は微笑んでいた。

日出国の序

「……ふむ」

私は部下の報告を聞いていた。

「つい先日、何の前触れもなく古い洋館が現れました。貴方の領域ではありませんが、妙だと感じたので、報告しておきたくて」

「そうかそうか。それで、ぼろぼろになって帰ってきたというわけか」

私はいたずらっぽく部下の状態を暴露してみた。この部下は少しかわいげがない。少しは取り繕って戸惑うだろうという私の思惑を打ち消した。

「ええ。客人として穏便に済ませたつもりでしたが、攻撃されてやむなく戦闘に臨みました。それがこの結果です。まあ、一回死にましたが」

表情一つ変えない部下は、本当にかわいげがない。

「そうか。そうだな、私の大切な部下を殺されたのだから、それ相応の責任はとってもらわなくてはな」

「はい。では、僕は今、何をすべきでしょう」

「決まってるよ」

私は立ち上がり、仕事部屋を出る。部下に答えた。
「カレー食べに行こう」

冥界の序

幼いころからの友人の弟子が失踪してからというもの、もう三年も経っている。オレはその弟子君の搜索に、自分では全力を尽くしているつもりだったが、それも及ばないらしい。いまだ見つからずだ。友人は弟子の不在にとっても落ち込んでいる。旧友として、力になりたい。そう思っずと、搜索を続けている。

その進展の兆しを見出したのは、俺の大切な部下だった。

「玉霊殿？」

「はい。地上に突然現れた洋館だそうです」

「突然、ねえ……。初耳だ」

「あなたでも察知できませんでしたか」

「今君に聞かせてもらって初めて知った」

別に弟子の失踪と洋館の出現を無理やりつなげるつもりはないけど、おかしいと感じたものはすべて納得がいくまで調べ尽くするのがいい。

「ねえ、ちょっと下見してきてよ」

「わかりました」

そういつて、部下は地上に降りて行った。

卑屈な序

そういえば、妙な洋館ができたと聞いた。しかも不気味な雰囲気を持っていて、私の確認する限りでは、訪れる者は皆傷だらけで帰って行った。そんな情報がこの樂園に広がり、今では好き好んでこの洋館に近づくものはいなくなっている。

これは、好都合だ。こんな駄目な私の暮らす場所としては、最適

だ。

この洋館の近くに住んでいれば、きっと誰とも会わずに済む。だれも洋館を怖がって近づきやしないのだから。虎の威を借る狐のようだけど、なんでもいい。

私は、とにかく人目を避けたい。できれば死にたいけど、臆病な私はずいぶんと生き延びる。結局、死ぬのが怖い私は、生きても死んでもいい。

死にたくないなら、せめて人のいないところでひっそり暮らしたい。私の願いは、それだけだ。

楽園の序

「洋館が、突如現れたそうさ」

僕の目の前に突如現れたハンターは、そんなことを言った。

「ふーん」

「あまり驚いていないようだな」

「いきなり何かが目の前に現れるのは、あなたのおかげで慣れっこになったもので」

「はは、役に立っているようで光栄」

皮肉とわかつたうえで流しているのだろう。というか、もともと彼の持ってきた情報は、僕には何の価値にもならない。この楽園を見渡せるから、洋館が建つたのもすぐ察知できた。

「どうする？ 楽園の管理人としては、この異変、どう思う？」

「別に、何ともないよ。それよりも僕はミーちゃんと戯れていた」「怠惰だな」

「危険な匂いはこれといって感じないから。仮にあったとしても、誰かが対処するよ。そういう性格の住人が何人もいるのを、知ってるから」

「なるほど」

そうして、僕は膝の上でごろごろしているミーちゃんをあきるま

で撫でるのであった。

俳聖の序

私は縁側から空を見上げていた。雲一つない真つ青な空で、その美しさは私の心に響いた。だが、言霊にするにはまだ足りない。というか、言霊を編み出す気になれなかった。

弟子が失踪して三年。いつになったら、私は弟子と再会を果たすことができるのだろうか。旧知の仲を頼って手伝ってもらってはいるものの、彼の力でさえかなわないことらしい。なんだから、旧友に申し訳がない。

——君は、今どこにいるの？ 体、壊してない？ ひどい人たちにいじめられたりしてないよね？ 君は強い子なんだから、きっと大丈夫だよな。

楽園の管理人にも問い合わせてみたが、見つからないらしい。この楽園にはいないのだろうか。もう、この際楽園の外でも構わない。ただ無事で、また会えるチャンスがあるのなら、君がどこにようと構わない。

ただ、無事でいてほしい。私の願いは、それだけ

序・それぞれの行動記録（後書き）

序章で、いろいろとキャラがわんさか出てきました。登場人物でもあれだけいっぱいなのに、書ききれるかなあと最初っから不安です。

一、始動（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界に組み込んだパロディです。閲覧の際はご注意ください。

一、始動

世界の隅っこにあるという、僕らの居場所「楽園」。ここはどこにでもあつてどこにもないというなんだか妙な立ち位置の世界らしいが、その住人の一人である僕はその辺の哲学には興味を示さなかった。

僕はコンテ^{いっとき}ーという。どこにでもいる普通の海軍軍人で、楽園から一時ばかり離れていた。というのも、僕の上司から指令が下ったからであり、それを終えた今は帰路についている。

長い船旅だ。向こうの港から楽園まで、いったいどれくらいあるのか、気が遠くなるからもう計測するのはやめた。

楽園というのは外の世界からは決して見えないと聞いたことがある。この船は僕を出迎えるための特殊な船で、その船長も楽園の住人。楽園の外に出てはいるが、外の者たちはこの船のことを認知できない。まあ尊敬している提督も同じなのだろうか。いや、同じではない。そうでなければ、この僕を楽園の外へ連れ出すことはできないのだから。きっと、提督もこちら側の人間なのかもしれない。「ジョン。じょーんー?」

甲板で物思いにふけていると、背後から声がした。振り向くとキャプテン・コロンブスがそこにいた。

「なんです、クリス」

「夕飯にしよう。今日はコックの得意なハンバーグだぞー。目玉焼きも乗つけてくれるんだぞー」

「そりやあなたが毎度のことリクエストしていますから、作り続けてうまくもなります」

「いいじゃないか。うまいんだぞハンバーグ！ しかもうちの自慢のコックの手作りだぞ！ ほかの奴には絶対かなわないもんね！」

これで本当に僕より古参だというのが今でも疑わしい。なんでこの人はこうも幼稚なのだ。……航海の腕は認めるけれど。

彼とは、僕のちょっとした職務上よく付き合うためか、長い時間を共有して今では愛称で呼ぶほどにもなっている。彼の幼さにも慣れた。うまくあしらうこともできるから、コロンブスの船内のクルーたちからはちょっとした尊敬を受けていた。

「さっ、みんなお待ちかねだぞー」

「はいはい」

キャプテンに手を引かれ、僕は船内に戻る。中はちょっとした祭り状態だった。コロンブスをはじめとする船員たちは、僕と同様長く故郷を離れていた楽園の住人だ。今日の夜に楽園に上陸する。焦がれた故郷に帰れるのだから、お祭り騒ぎになるのも不思議じゃない。

最後には飲み明かして宴会状態になり、コロンブスが酔いつぶれて寝室に運び込まれることでお開きとなった。彼は酒乱だ。酒豪の僕とは相性が悪いのだ。

淡々と述べている僕も、今夜に楽園へ着くのは内心喜ばしく思っていた。つい飲みまくって少しふらつくが、まだ大丈夫だろう。

「大尉」

客室で休んでいる僕に、コロンブスの仲間であるクルーの一人が声をかけてくれた。

「すみませんね、うちのコロちゃんかはしゃいじゃって」

「いや、いいですよ。僕も少し羽目を外しすぎました」

「酔い覚ましに、少し付き合いませんか」

そういつて僕に、ジュースの入った瓶とグラスを見せる。

「いいですね。ぜひとも」

彼の誘いに乗った。

騒がしいコロンブスがいなくなり、落ち着きのあるクルーたちとのこうした団らんは、僕にとってはちょっとした情報を得られる機会でもある。クルーがこの誘いを持ちかけてきたのは、暗に情報を与えるという彼の好意だ。

「そういえばね、楽園で留守番してるクルーからさっき情報を受信

してね」

「興味深いですね。聞かせてもらえませんか」

「ええ。実はねえ、楽園に、突然古い洋館ができたっていうんですよ」

「洋館？」

「そう。しかも何の前触れもなくね。そこに何かが建てられるとかって予定はなかったのに。楽園の管理人に聞いたらしいので、そこは間違いないかと」

「その洋館が何か恐ろしいことをたくらんでいると？」

「さあ、そこまでは……しかし、妙な噂は流れているようですね。

その洋館を訪れたものは、必ず負傷して帰ってくるそう。あくまで噂ですから、確かめるまでは噂でしかありませんが」

「ふーん」

僕はジューズを瓶にそそいだ。

「その洋館の名は、玉霊殿というそうです。そこに住む者が何者なのかまでは把握しきれていませんが」

「ぎょくれいでん、ね」

僕はジューズを一気に飲み干した。

「しかし、あなた方クルーは本当に優秀ですね。まるで楽園すべてを見渡せる目をお持ちのように思えるよ」

「まさか。俺達は仲間内で情報を送受信してるだけです」

「謙遜しなさんな。クリスだってここまでの情報通ではないよ」

「コロちゃんも外の世界に関してはとてつもない物知りなんですけどね。楽園内のこととなるとまるつきりダメダメなダメコロちゃん」

コロンプスは外と楽園を何度も行き来している分、外のあらゆる世界の事情に精通している。が、楽園内は無頓着なのだ。そうなるのも、長年住みついた故郷のことを深く知って今更どうするという考えがあるからだ。逆に、コロンプスの部下たちは外の情報を最低限得るだけで、楽園内の事情はやりすぎなほどに精通する。コロンプス一人では不足する部分を、クルーたちが補っている。コロンプ

スもまた、クルーたちを補っているという協力の形をとっているのだ。

僕は一人で行動するから、こうした補助は少しうらやましい。

「しかし、楽園内には本当に数えきれないくらいのクリスの部下がいるんでしょう。そう思うと監視されているようで怖い怖い」

僕はおどけて笑って見せる。

「あは、別に怖いと思わないで下さいよ。俺たちは楽園の住人ですから、同郷のものには甘々です」

「それはつまり、楽園の外のものや、楽園の平安を害するものには、激辛だと？」

「大尉は読解力が豊富ですね」

クルーはそういつて笑った。

「しかしいいんですか？ 情報というのは商売道具でしょう？」

そう尋ねるとクルーはジューズをなみなみとグラスに注ぐ。

「言っただでしょう？ 俺たちは同郷には甘いんですよ」

外の人間には容赦なく高い情報量を要求したとみた。

楽園に寄港するまでのほんの少しの間、僕は楽園に現れたという玉霊殿のことを考えていた。楽園の行事や事件のことなら、楽園の管理人である増田が知っている。彼も住人から聞くまで玉霊殿のことを知らなかったというのなら、おそらくこれは楽園にとって想定外の事件なのだろう。

「……ふ」

こういう何かを匂わせるできごとというのは、いつの日も僕の好奇心を刺激する。今回も例に漏れない。帰ったらまず管理人に事情を聞こう。そして興味本位で玉霊殿を訪ねる。楽園の外では、軍人としての訓練を受けていた。楽園内でも必要とあらば遊びで戦いに興じることもある。腕っぷしには覚えがあった。そうやすやすとやられる僕ではないと自負しているし、死にそうなら全力で逃げる方法も熟知している。

笑いがこみあげてくる。コロンブスから、到着を告げられてもな

お、僕は故郷の地を踏むのを楽しみにしていた。

一、始動（後書き）

本編スタートです。今回はコンTEEさんと航海組。でもコロちゃんもクルーもあんまり出てなかったな……

二、一度目の死（前書き）

このお話は『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界に組み込んだパロディです。閲覧の際はご注意ください。

二、一度目の死

妙なものを感じたのは、我が主人だけじゃなかった。僕も少なからず、心はずしつと来るものがあつた。

この楽園の管理人でさえすぐに感知することがなかった。古びた洋館「玉霊殿」の出現は、僕にとってはあまり歓迎できない。考えが浅いから、何の根拠があるわけでもないけれど。

管理人は興味を示していないし、主人はあれでも忙しい身であるとなれば、荒事担当の僕が様子を見るしかないだろう。

僕の仕える主人は、日出国を統べるとにかくどえらい方である。その方から重宝されているのは大変名誉なことだ。その人のために尽くすのは、僕の最大の喜びでもある。

そう思うと、自分の命などいくらでも差し出してもいい。

玉霊殿。突如現れた大屋敷。目の前にたたずむ古びた建物は、何とも恐ろしげな雰囲気を醸し出してやまない。楽園の住人達は、みんな怖がって近づきたがらない。未知の領域に踏み込むのは、勇気がいる。本来、僕にとっては命の危険なんて考える必要もないんだけどなあ。

一歩近づくと、どす黒く錆びついた柵が一瞬だけ揺れた。自動で開いてくれると思ったら違うらしい。どうやら、自分でどうにかしなければならぬようだ。

少しだけ力を入れると、割とすぐに柵は開いた。その向こうにある赤茶の扉に、まっすぐ進んでいく。

「御免」

返事がない。住人は留守なのだろうか。居留守を決め込まれたのだろうか。

「御免！」

もう一度声をかけてみる。やっぱり誰もいなかった。うん。この悪質な静けさは居留守だろう。

僕は扉を開けんとする。鍵がかかっていた。これは徹底した居留守だ。ならば僕のすることは、一つ。

この扉ひとつ、引っこ抜くことはたやすい。僕はいったん扉から離れて、力の限り蹴破った。扉は僕の足の形のへこみを作って倒れ伏した。

一歩中へ入る。柵と違って、中はこぎれいだった。しかも広い。

これだけの広さは、我が主人の住まいと同じくらいかもしれない。「ん……」

足元を、黒い猫が横切った。居留守は解いたらしい。

「ねこさん。このお館の持ち主に会わせてもらえませんかね」

しゃがんで黒猫に頼んでみた。その猫は僕から離れて奥のほうへ行こうとした。猫に言葉が通じたのかな、と一瞬うれしく思ったが、その心は打ち砕かれた。

猫が、こちらに振り向きざま、弾を一発、僕に放ってきた。その弾を、僕は右手で受け止めた。握った拳の隙間からしゅうしゅうと立ち上る。のんびりと手を開いたら、手のひらが思った以上にやけどしていた。が、すぐに治った。

「しつけのなつてないねこさんですね」

できるだけ穏便に済ませたかったが、相手は敵意と戦意でいっぱいだ。ならば、こちらも自衛のためにあらゆる努力をすべきだろう。懷から、札を出す。管理人が決めた「スペルカードルール」に従い、僕も自分の持つスペルカードを出す。今はまだ、それほど強くないスペルで構わない。というか、まだカードを使うときじゃない。試しに軽く、ただの弾幕を放ってみる。黒猫に向かって、一直線に向かつていく。燃えているように赤く染まった弾は、まともに当たれば相手を焼く。黒猫はそれをすいすいよけた。

こっちと目があった。明らかな敵意だった。こっちは客人として

穩便に済ませたかったのに。扉に鍵がかかっていたのはそちらの悪意だろうに。

今度は、向こうから来た。通常弾幕でさえ厚くて隙間を見つけにくい。避けたと思った弾幕が、ぴたつと止まって僕に向かってまた突っ込んでくる。こういうのはめんどい。余計な体力を使いたくはないんだよなあ……

ならば、することは一つ。

突っ込んで直接たたく。

「弾幕であれば、いいんですから」

僕は高く跳躍して、そのまま猫へと急降下する。右の握り拳には、燃える弾が握られている。それを、猫に思いきりぶつける。

「ルール違反ではありませんよね」

ぼわん、と煙が立ち込める。一瞬視界が悪くなったが、猫によって煙はすべて払拭された。

そこには、黒猫がいなかった。

代わりに、僕と同じほどの背丈の男が、立っていた。

彼は濁り気のある深緑の衣をまとい、艶のある靴を踏み鳴らし、僕をその吊り上った目でにらみつけている。

頭部の両端に、猫の耳と、よく見たら尻尾が生えていた。なんだあれ、変化しきれないじゃないか。

「あ、さっきの無礼なねこさんですか」

「無礼は余計です」

「しゃべれるんですね」

化け猫だったようだ。人に化けることができるんだ。玉靈殿には、化け物が住んでいるらしい。

「悔しいですが、少しスペルカードを使わせてもらいましょう」

化け猫はスペルカードを一枚発動した。

「恨符……人喰霊！」

何が来るんだろうと構えていると、いつの間にか周囲を弾幕が取り囲む。四方八方から僕に向かってくる。飛んで避けたが、そのままたつ立っていたら爆発に巻き込まれて体がバラバラになるところだった。

着地して一息ついている暇もなかった。また弾幕が四方八方から取り囲んで僕との距離を縮めてこようとする。しかも、さっきの爆発した弾幕も爆発で終わるのではなく、ずっと僕に付きまとっている。

「う……」

まずいなあ。結構押されている。たぶんだけど、あの化け猫はこれ以外にもいっぱいカードを所持している。だとすると、きっとこいつは強い部類に入る化け物なんだろう。

弾幕を避けるので精一杯なのに。ここはいったん退いて我が主君に相談すべきだ。

一瞬でも、化け猫から目を離したのがいけなかったのだ。出口を確認すべきではなかった。

その一瞬だけで、化け猫は弾幕を張りつつ僕に向かっていった。

「ほら、わかりますか。あなたの負けです」

鋭い手刀が僕の腹を正確に打ち、怯んだ隙に弾幕が迫ってさつきよりも盛大に爆発した。

そのせいで、僕は死んだ。そこからの記憶が、っすだけ途切れている。

次に目を覚ました時には、玉霊殿の外に放り出されていた。バラバラになっていたであろう四肢はちゃんとくっついている。一回分、僕は死んだ。今日は、あと六回死ぬる。

目は、橙に染まった空を映している。背中には、冷たい土の感触が残る。少し痛む体を起こして、僕は周囲をもう一度確認する。

玉霊殿はない。あのお館からかなり離れたところまで放り投げたされたんだらう。化け猫は結構律儀らしい。ここまで運んでくれるとは。

まあいい。僕が殺されてしまうなんて、相手は相当の手練れだ。味方に行きわたることができれば、我が主君の助けにはなろう。が、敵のままならとてつもない脅威になるのは違いはない。

いずれにせよ、これはあの人に報告しなければならぬ。

僕は、のんびりと主君のもとへ帰って行った。

二、一度目の死（後書き）

妹子とねこさんのお話です。この世界の妹子はずいぶん淡泊な気がするけど気にしないよ！ ちなみにねこさんのスペルカードの元ネタはお隣の「スプリーニーター」です。あの弾幕で事故ったのも少くない……

三、第二の犠牲（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラ達を『東方』の世界に組み込んだパロディです。閲覧の際はご注意ください。

三、第二の犠牲

オレは部下に、玉霊殿を見てきてほしいと頼んだ。オレの仕事場である冥界は、玉霊殿の立つ地上とは別の世界であると同時につながりを持っている。部下の鬼男君には、いつも面倒かけさせちゃってるんだよね。

この冥界には、それなりの力をもつものであれば、簡単に来るところができる。今日もそう、日出国の天子、聖徳太子がやってきた。

「おはよう、太子」

「おはよう、閻魔大王」

ふと気になることがひとつ。今日の太子は、どうも怒っているようだ。何があつたのかは、だいたい予想がつくんだけど、確認せずにはいられない。

「どうしたの、そんな怖い顔。もしかして、お氣にの妹ちゃんがいじめられたのかな？」

オレの茶化した質問に、余計怖い顔して答えてくれた。ああ、やつぱし凶星だ。

「先日現れた玉霊殿の件で、少し話がある」

怖い顔ではあるけど、太子はいつもと違ってずいぶんマジメだった。オレの知っている太子は、いつもはしょうもないことで遊んだり仕事を抜け出したりする（まあ、そのしょうもないことを一緒になつて楽しんでるオレもオレだけど）。だけど、役目を果たさないわけじゃない。それを踏まえると、むしろ太子は誰よりも日出国のために身をささげているといつてもいい。

そんな太子が、本当にマジメになつてオレのところに来るんだから、きつと相当な話を持ちかけられるんだろう。

「いいよ。まあ、座つて楽にして」

オレは椅子をすすめた。

「玉靈殿のことだっけ？　今、オレも鬼男君に調べてもらってる最中だからあんまり有益な情報はあげられないけど」

「それは構わない。もう有益な情報は得た」

「あらら。仕入れるの早いねー」

太子は大きく息を吸った。

「妹子が、一度殺された」

オレは頬杖ついたまま、動けなかった。太子の言った言葉の意味は、ちゃんと分かっている。

太子の大切で大切に、この世で一番大切な部下、小野妹子ちゃんちゃんづけしてるけど立派な男の子だよ、念のため（顔も女の子みたいなんだけどね、それをつついたらボディーブロー極められちゃった）。妹ちゃんは、樂園の一般的な人間とはちょっと違う事情を持っている。

妹ちゃんには、一日に七回までなら死んでも生き返ることができちゃう、っていう、なんかありがた迷惑な呪いがかかっている。その呪いは、太子が妹ちゃんと初めて出会う前からかかっていたらしい。妹ちゃん本人はそれほど気にしてないみたいだけど、太子はこの呪いをひどく憎んでいる。だから太子は、この呪いを解くべく個人的に動いている。もちろんこれは与えられた役目とか関係なしにこの呪いのことでよく相談を持ちかけられるし、それがもとで太子とは仲良くなった。皮肉な話だけどね。

その妹ちゃんが、一度だけとはいえ、殺されちゃったなんて。

妹ちゃん本人は、とてつもなく強い。結構腕に自信があったオレでさえ、妹ちゃんのパンチはけっこう来るものがあるほど。下手な相手なら、一度も殺されずにのしてしまえるほどの妹ちゃんだ。

「一度殺されちゃったのね」

「そう。妹子はなんともないと言っていたが、……あとで検査をし

たら、死因は爆死だった」

「爆死い！？ いつの話してるの？ 爆音なんて聞こえなかったよ？」

「噂になっっている玉霊殿で戦ったそうだ。相手が一枚上手だったらしくて」

「玉霊殿は防音設備が完璧なんだね……」

妹ちゃんが死ぬなんてのもありえないけど、その死因が爆発だなんてのももつとありえないよ。相手は爆弾狂なのかな？

「許さん。マジで許さん。妹子を傷つけた罪は何より重い。だから閻魔、私と一緒に玉霊殿を襲撃してほしい」

真剣なまなざしで、太子は割と物騒な頼みごとをしてきた。太子にしてみれば、これは本気でのお願いごとなんだろう。だけど、オレは決断をすぐに下せない。

「ちよつと待った。太子、それ、本気だよな？」

「本気だ。本気すぎ逆に普通になっちゃったよ」

「襲撃して、それで妹ちゃんを爆殺した犯人の罪は洗われるの？」

もしその犯人が死んだら、オレ、天国か地獄か伝えなきゃならないんだけど」

「閻魔には、面倒かけると思う……。それに、襲撃は私の単なる自己満足でしかない。それで罪が償われるわけがないのも充分知っているよ。……だけど、一度死んだ妹子に私がしてやれることなんて……」

太子の顔が悲しそうに歪んでいく。あーあ、泣かせちゃったな。

閻魔大王ともあろうオレの失態だ。こんな無謀な作戦に出ようとするほどに、太子は悩んでたんだ。

「あのさ、太子」

オレは太子の頭を撫でてみた。

「太子が妹ちゃんにしてやれることなんて、いくらでもあるよ。今は、玉霊殿の調査をしつつ、妹ちゃんのそばにいてやるが一番

なんじゃない？ あんまり思いつめちゃだめだよ」

「閻魔大王……」

「ねっ？」

このイカスマイルで、落ち込んでいる人たちを励ましてきた。少しは、太子の役に立てたかな。

「ん。もう少し、穏便な方法を考えてみる。それに、妹子は私がいなくて駄目だからな」

どっちかという太子が妹ちゃんいないとダメなんじゃないの？
少し吹っ切れたようで、最初のマジメな顔は緩んでいた。

「あ、そういえば、鬼男は？」

「ああ、うん。玉霊殿の下見に……」

嫌な予感が、背中を伝った。太子のしてくれた話を瞬間的に思い出した。

爆死？ 爆発？ 相手は少なくとも最強レベルの妹ちゃんを爆殺できるほどの腕なんだ。

「あ、ちよつ、閻魔！！」

太子の声も知らず、オレは何も考えずに地上へ降りた。

玉霊殿の場所は知っている。空を音速で走って、玉霊殿にすぐにとどり着く。

あのまがましい感じの古びた洋館。ついさっき、オレは部下の鬼男君に調査を頼んでいた。それを忘れていたなんて、オレは本当にダメイカだった！

洋館の庭に、見覚えのある部下が倒れていた。全身赤黒く染まっ
ていて、息も絶え絶えにそれでも動こうとしている。

「鬼男君っ！！」

閉じている柵をあつさりと飛び越えて、傷だらけの部下に近づい

た。見たところ爆発に巻き込まれた形跡はないけど、相手に圧倒されたのはわかった。鬼男君もオレをどつく程度には強いのに、その鬼男君すらやられてしまうとは。

「……あ、大王」

「鬼男君？ もう大丈夫だよ、オレが来たから。すぐに傷を癒すね」
抱き起して鬼男君の傷を消すべく魔法を使おうとしたが、鬼男君に止められた。

「駄目です、大王……」

「何言つてんの！ いくら鬼だったってこんな深い傷、ほつといたら死ぬよ！？」

「まず、玉霊殿から出ないと……」

「でも」

「お願い、します……」

「鬼男君……」

息も苦しいのに必死で懇願する鬼男君を見たら、その願いを無視するわけにはいかない。オレは鬼男君を抱きかかえて、そのまま柵を飛び越えた。ここから近い家といえば、拳法家の平田君のところだろう。オレは目的地をすぐに決め、音速で（ただし鬼男君に負担がかからない程度には抑えて）飛んで行った。

三、第二の犠牲（後書き）

部下組の二人が何か不憫になつてゐる気がしないでもない。このままだとの部下も一度は不憫な目に遭いかねないよね or z

四、平田相談室（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界に組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

四、平田相談室

突然、閻魔大王が今にも死にそうな鬼男を抱えてオレの家に来たことは、少なからずオレにとっては衝撃的だった。術を使いたいから適当に一室借りたいとのことだったので、先ほど掃除したばかりのオレの部屋に通した。

閻魔大王は、身体能力を上げたり下げたりする術を得意とする。自然治癒力を一時的に強くするのなんてわけない。そばで見せてもらったけど、鬼男の傷はたちまちに消えて行った。やっぱすごいな、この人は。

鬼男は、眠っている。

「ふいー。ありがとね、平田君」

「いや、オレは何もしてないよ。……それより、何があつたんだ？」
拳法の修行のために鬼男とたまに組手してもらったことがあるが、鬼男は強い。戦いに慣れているし、相当訓練を積んだ鬼だ。そんな鬼が、ここまでコテンパンにされるなんて。

閻魔大王は沈んだ顔で、答えてくれた。

「玉霊殿、知ってるだろ？」

「ある日突然現れた大屋敷だよな。割と物騒な」

「うん。実は鬼男君に玉霊殿の調査を頼んだんだけど、そこで襲撃されたらしくて」

「そりゃ災難だったな……オレも同じような目に遭ってちよつと走馬灯が見えたよ」

「君も行ったの？」

オレは黙ってうなずいた。何の役に立つかなんて思わなかったけど、どこういうわけか玉霊殿でオレがコテンパンにされたことを打ち明けた。

「玉霊殿の噂は一応聞いてたから興味本位で行ってみたんだよ。できれば仲良くできたらって思ってたからさ。でも庭に入った途端、

いきなり弾幕を張られてさあ……、しかも攻撃してきたのが黒猫だったんだよ」

「黒猫……？」

「そ。楽園で、動物でも弾幕張れるんだな。……いや、うさみちゃんとかがいるし、今更驚くことでもないか」

「猫ねえ。猫は好きだけど、乱暴なのは嫌だな」

のんきな相槌を打たれつつ話していると、鬼男が目を覚ましたようだった。

「大王……」

「あ、鬼男君！」

閻魔大王は素早い動きで布団に寝かせた鬼男に駆け寄った。この動き、なんかしゃしゃかして気持ち悪い……

「僕も、その黒猫と戦いました。なんとか切り抜けようとしたんですが、強くて……どうにかお屋敷の外へ出るので精いっぱいだったんです」

布団から出ようとする鬼男を、オレと閻魔大王で止めた。

「駄目だよ、鬼男。もう少し休んでろ。今日は泊まってっていいから」

「でも」

「いいんだよ。閻魔大王も一緒にいいからさ」

「いや、それが一番困る」

「なんで！？ 鬼男君！？」

「だって……それは、そのう……」

鬼男は目を泳がせながらもごもごも何かをつぶやいている。聞こえないから、鬼男の口に耳を近づけて聞き取った。

「え、大王が？ 寝てると？ 布団にもぐりこんできて抱きついたり？ 一緒にいると何かと甘えてきたり甘やかしてきたりするから？」

オレが言葉を口に出すたびに、鬼男はオレの背中や肩あたりを平手ではしばしたいてきた。地味に痛い爪で刺されるよりはいい

だろう。というか、この二人は普段そんなことしてんのか。

「いいじゃん！ 鬼男君はオレの大切な秘書だよ？ それに小さいころからずっと一緒だったでしょうが。鬼男君が生まれたばっかの時から、オレが世話してたんだからね！ 君のご両親が早くに亡くなってたし。ていうか鬼男君は秘書以上に、オレの大切な家族なんだよ！ 甘やかして何が悪い！！」

大王はむん、と胸を張って反論した。そういえば、オレがチビの頃、大王によく鬼男と遊ばせてもらったな。あのころから大王の姿は変わってないけど、それは樂園世界じゃ気にするようなことじゃない。大王や鬼男と知り合い始めて間もないころから、大王は鬼男にとてつもなくて甘い。馬鹿親レベルはきつとマックスだ。

「胸張って言うな！ だいたい、僕はもう立派な秘書です！ 大人です！ 一人前です！ 自分のことは自分でちゃんと責任持たいんです！ もうそろそろ子離れしてください！！」

鬼男も負けじと言い返す。顔が真っ赤っ赤だぞ。

「親にとってはね、子供ってのはいくつになっても子供なの！」

「威張るなやイカ！！」

「だって、鬼男君、小さいころからしつかりしてるし、むしろオレのほうがダメダメだし、今だって何でもかんでもやっちゃうし、少しくらいオレに甘えないとどこかで壊れちゃうよ……」

急にしゅんとして、声も勢いも衰えた。が、それでも、いやむしろこっちのほうが鬼男にとっては大ダメージだったらしく、鬼男は言葉を詰まらせた。

「それにいつも他人行儀だし、仕事中はまあ仕事だから礼儀はいるけどさ、それ以外の時は砕けていいっていうのに敬語使うしよそよそしいし、ワガママ言わないし……」

大王はいじけながら愚痴をこぼす。

「鬼男君、オレのこと嫌いなのか？」

これは鬼男にとつてのクリティカルヒットというか、急所に来る言葉だったようで、鬼男にはさっきまでの威勢を取り戻す元気はな

くなっていた。

「違いますよ！　だって、あなたは閻魔大王じゃないですか」
「ぶうー」

大王はいじけて体育座りでそこを動かない。なんという頑固。コロちゃんがいじけてずつと床に腹ばいになって嘔泣きしているときくらいの頑固だ。てこでも動かないな、こりゃ。

「鬼男。いいから少しそつとしよう」

「え、だけど」

「それより、治りたてで悪いんだけど、夕飯作るの手伝ってくれないか？」

「ああ、うん。それは構わないけど」

無理やり部屋から引つ張り出させた。部屋から出るとき、心配そうに大王を見ていたのを、オレが見逃すはずない。この二人は、本当にいい親子だよなあ。

「ごめんな、平男。僕たちの事情に巻き込んで」

「いいって。こういうのは慣れてるから」

前は聖徳太子が似たようなことを愚痴してきた。妹子は真面目で仕事を丁寧につけて、強くて頼りになる部下だが、自分の命になると無頓着でしようがないとか何とか。

「傷は大丈夫か？　目で見える分には問題なさそうだけど」

「ああ、大丈夫。もうすっかり元気だよ。大王の能力と僕的能力って相性がいいから」

「身体能力を上げる力と、自分の体に限って奇跡を起こす力か。確かに」

「……まあ、本当に悪かったよ。迷惑かけた。今度なんかうまいのおごるから」

「楽しみにしてるよ。ところで、鬼男の得意な料理ってある？」

「だいたいいんでも作れるけど、自信あるのは甘いものかな。あとは、オムレツ。でもなんで？」

「それ作ってやりな。大王の機嫌直せるよ」
鬼男は笑ってうなずいた。

その後、夕食の匂いにつられて出てきた閻魔大王は、鬼男特製のオムレツですっかり機嫌を直し、しまいにはなぜ機嫌が悪かったのかさえ忘れた。食事後はのんびりして、一緒に風呂入って一緒に布団で寝ていた。この仲良しさがすこしうらやましくもありほほえましかった。

（オレの役目も終わりだな）

楽園に住むオレ、平田平男の主な役割は、こうして人々の間を取り持つこと。戦闘はできるけど専門じゃない。今日の相談相手は閻魔大王とその家族の鬼男。

仲直りできてよかったよかった。明日の朝には、またいつもの二人に戻って、持ち場へ帰っていくだろう。オレは二人の寝室の戸を静かに閉め、家の明かりを消した。

四、平田相談室（後書き）

平田の役割がこんな感じになったのはフィーリングのせい……書いてるうちに閻魔さまと鬼男くんは親バカとしっかりしまくってる子供に見えてきてこんなになっちゃったんだぜ。

五、深夜の会合（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラを『東方』の世界観に組み込んだパロディです。閲覧の際はご注意ください。

五、深夜の会合

我が愛する故郷・楽園。そこに僕は帰ってきた。コロンブスと別れた後、僕は仮住まいと化している楽園の日出国へと歩いて行つた。そこをとりまとめている指導者・聖徳太子とは持ちつ持たれつの關係を保っている。僕が外へ行くたびに得てくる情報を家賃代わりに彼の与えた小さな小屋を住まいとして与えてもらっていた。

僕はその仮住まいではなく、聖徳太子の住む宮殿へと急いだ。帰郷のうれしさに、まだ眠れそうになかった。この高揚した気持ちを、誰かにぶつけずにはいられないのだ。

聖徳太子は僕を歓迎してくれ、ついでにときつくない酒までふるまってくれた。ただ、彼の傍らに、いつも一緒にいた紅の少年がいないのが気になった。

「まあ飲みんしゃい。長旅で疲れてるっていうのに、さきに私のところまで来て、ご苦労だな」

「いいんですよ。ちょうど話し相手が欲しいほどに興奮してましてね。とても眠れそうにない」

「ふむ。コンテはそういうやつだったな」

太子は盃に酒を注ぐ。

「ところで、あなたが心底氣に入っているあの少年はどうしたんです？」

そう尋ねると、太子は少し表情を陰らせた。聞いてはまずいことだったと、言つた後で後悔した。

「玉靈殿の話は聞いているか？」

「ああ、帰港中、クルーの一人から聞きました」

「私もその洋館が氣になつてね、妹子に調査を命じた。そしたら、一度殺されて戻ってきた」

あまり言いたいことではなかっただろう。それなのに、太子は聞

かれたことには淡々と答えてくれた。怒りも憎しみも、後悔の色さえ見せず、透明な声で答えてくれた。

一日に七度まで死ぬことを許された呪い。それが小野妹子を拘束する枷だ。妹子は強いし、自分の命をひとつぶん失う必要もないほど、戦闘には慣れていたし、実際僕も圧倒するほどだった。その妹子が、一度死んで戻ってきたという事実は、僕にとっては衝撃的だった。

「何があつたというんです？」

「妹子に聞いたところな、黒猫がいたらしい」
「猫？」

「そう。しかもその猫は人間に化けたらしい。隙を与えない弾幕でやられたと」

あの洋館の噂はある程度聞いている。入った者は必ず傷ついて帰ってくるというまことに不吉な噂を。

「で、その妹子は？」

「知り合いに預けた。体がまだ本調子じゃないのに仕事しようとするから、無理やり休ませた」

「そうですか」

「どうだ？ 好奇心は揺さぶられたか？」

太子はにやりと笑って問いかけた。こういつたいかにも危険な場所を探検したくなるのは、僕の悪い癖だ。一生治ることはない。

「ええ、とても。僕は入るな危険があると入ってしまいたくなる性格でしてね。幼少時はよく叱られたものです」

「まったく。お前の怖いもの知らずには呆れて感心するよ」

「そりやどうも」

僕は酔いの回らないうちに退散したくなる。

「おや、もういいのか？」

「今夜は眠れそうにない。玉霊殿に行つてきます」

「相手は寝ているかもしれんぞ」

「夜のうちに訪れたほうが相手の調子は不完全でしょう。怖いもの

知らずとはいえ、僕も痛いのは御免ですのぞ」

「そうか」

深夜の訪問は無礼。だが、楽園に外の世界の常識はない。非常識は常識なのだ。

「あ、と。そうだ」

僕は玄関で立ち止まり、振り返る。

「これ、いただいていきますね」

まだ残っている甘めの酒が入った瓶を、僕は揺らす。

酒がこぼれないよう、僕は地を蹴り空へと浮かぶ。自分に、空を飛ぶ術をかけた。まだ研究を深めていくべき術だから、この術が効く時間は限られている。が、玉霊殿まで行くには充分だ。

今頃、聖徳太子はうまくいったと内心ほくそえんでいるだろう。

彼は玉霊殿ににいるという猫が憎いはずだ。最愛の少年、小野妹子を一度とはいえ殺したのだから、それ相應の、いやそれ以上の報いを受けさせてやりたいだろう。だが、相手は、百人を一度に相手しかすり傷ひとつ負わなかったという経歴を持った妹子を一度殺している。最強クラスの妹子を屠った相手に、自分がいくんじや少し不安が残る。どれほどの強さか測りかねる相手だから、その辺の強い部類に入る楽園の住人を何人が送り込み、完璧なデータを取りたいのだろう。そして、相手を充分に研究し、対処法もすべて頭に叩き込んで初めて聖徳太子が殴り込みに行く。

そういう手筈を、聖徳太子はもくろんでいる。僕に玉霊殿の話を持ちかけたのも、僕の好奇心を刺激してデータ採取をさせるつもりだったからだ。つまり、僕は彼の手駒にされている。

僕はそのもくろみにすぐ気付いたし、だからと言って利用されていることに憤りを覚えることはない。玉霊殿に行きたいのは最初からあった気持ちだし、聖徳太子という人物がそういう人間であることは長年の付き合いからわかっている。今更どうこう言うこともない。

玉靈殿。突如現れたという古びた洋館。僕は錆びついた門の上空を飛び、玄関前で地に降り立った。猫には気を付けながらいこう。

僕は形式上のノックをしつつ、ドアを開ける。

玉靈殿の中は、オレンジ色の灯火によってほの明るい。風がひんやりと冷たい。

中央の階段から、黒い物体が降りてきた。おそらく、くだんの黒猫だろう。僕は少し構えながらその猫が降りてくるのを見守る。

僕の足元にゆっくり近づいてきた猫は、好意的な感情は何一つ持ち合わせていない。攻撃がくるか、だとしたらそれは不意打ちか正攻法か、僕は考えるのをやめない。

少し、緊張感が生まれる。妙な冷や汗が、額から流れ落ちるのを僕はわかってきた。この緊張感は、たまらない。

五分近く、僕とその猫は睨み合っていた。猫もどう出るべきか探っている。僕も猫がどう出るのか探っている。

「空、どうしたんですか」

階段の最上段から、青年のような声がした。

その声に反応した猫は、僕から目を離して声のしたほうへとつつとつ、と歩いていく。空と猫を呼んだそのものは、猫を抱きかかえ、階段を下りきった。

「あれ、こんな時間にお客様ですか」

彼は、僕より一つか二つ下ほどの青年だった。

艶のある黒髪なのはいいが、前髪で目が隠れている。隙間から覗ける目に、覇気が感じられない。浅葱色の装束には不似合いなほどの真っ赤なネクタイ、室内履きはなんだか子供っぽい。

何より僕が注目したのは、彼の左胸あたりに浮かんでいる、目玉

だった。半開きの目は、じつとこちらを見つめている。それに見つめられていると、なんだか落ち着かない。

（まるで、心を見透かされているような気がする）

「その通りですよ」

彼は猫の頭を撫でつつ、そういった。

「……なんだって？」

「この目は、心を見透かすんですよ」

青年はふつと微笑みを浮かべてそう答えた。

（今、何やら恐ろしいことを聞いた気がしないでもない）

「まあ、一種の恐怖ではありますよね。どんなに重装備でも、心と
いうのは装備ができませんから」

「なっ……!？」

背中を、嫌な汗がったう。

（こいつ、人の心を読んでいるのか!？）

「読んでますよ。現在進行形で。その証拠に、あなたの心の声に、
僕は答えているでしょう？」

彼の微笑が、僕の恐怖をあおる。猫は気持ちよさそうに喉を撫でられる。

（こいつは……）

僕は足がすくんで動けない。どう対処するか、とか、猫の攻撃はどうなる、とか、さっきまで考えを張り巡らせていた僕の心はそうする元気をなくしている。

「こいつは化け物だ」

目の前の青年は、微笑んで僕に言葉を突き刺した。なぜ、という疑問が心を支配する。僕は何も言わず、ただ立ち尽くすだけ。

「今、そう思っただけでしょう？」

相変わらず、彼は微笑んでいた。

僕は立ち尽くしているまんまだ。だって、本当にそう思ったのだから。

突如、猫が青年の腕の中から離れた。こちらに明らかな殺意を向けてきている。

我ながら、大した反射神経だと思う。猫の不意打ちを何とかして避けることができたのだから。

小野妹子を一度殺したほどの腕を持つ猫。そしてその主人らしき青年。二対一では、分が悪い。僕は襲い掛かる弾幕を避けつつ、玄関へと後ずさる。ドアが開いたのを確認してすぐ、地を蹴り飛び立った。さっきもこの術を使ったから、今度はさっきより長くは続かない。だが、できるだけあの洋館から離れておくべきだ。猫の弾幕のリーチから離れるくらい。

心臓の鼓動が、早い。触れなくてもわかるくらい、どくどくと早鐘を打っていた。

何も考えることなんてできなかった。一種の恐怖だ、あれは。心をのぞかれる。肉体のダメージを受けるよりも厄介な攻撃だ。

無我夢中で飛んでいたためか、どこに向かっているのかも目の前に何があるかもわからなかった。

だからだ。僕は目の前に迫っている木々に気付かず、顔から激突してそのまま落ちた。

「ぐえっ」

背中をもろに打った。地面が湿っていたのは、救いだ。柔らかくなっているから、痛みもそれほどひどくはなかった。

ここで、どつと疲労と眠気が出てきた。僕は痛みも泥まみれになった服もずぶぬれになった体の気持ち悪さも気にせず、思い瞼を素直に閉じた。

五、深夜の会合（後書き）

ようやく怨霊も恐れ怯む青年登場です。ぐだぐだになりそうだったのを何とか回避（？）できました。よかったよかった。ようやく物語が進みます。ほっ。

六、残酷な言葉（前書き）

このお話は『ギャグマンガ日和』のキャラを『東方』の世界に組み込んだパロディです。閲覧の際はご注意ください。

六、残酷な言葉

ふと、目を覚ますと、そこは森林の中でも泥の上でもなかった。背中には柔らかい布団、後頭部に感じる枕はざらざらと音を立てた。ゆっくりと覚醒していく頭を振り、上半身を起こす。

畳の匂いが心地いい。縁側から、太陽の光が差し込んできた。改めて見直す。いつも来ている装束はない。代わりに、あまりなじみのない着物を着せられていた。

（ああ、そういえば、心を見透かされて動揺して、すっ飛んでぶっかったんだっけ……）

僕は改めて自分の醜態を思い出し、穴があいたら入りたくなかった。噂はある意味間違っではない。ダメージは受けた。精神的に。

「あ、コンテール君。起きた？」

部屋に入ってきたのは、楽園の古参の一人・松尾芭蕉翁だった。

彼とは、外の世界の言葉を肴によく一緒に酒を楽しむ仲である。小さいころは、よく遊び相手になってもらっていた。僕の父親代わりになってくれていた人だ。

「……芭蕉翁が、助けてくださっただけですか」

「うん。うちの近くで変な音がしたから気になってね。そしたら驚いたよ。コンテール君が倒れてるんだもん」

翁は苦笑しながらことを話してくれた。

あの後、僕は倒れ、その音を聞きつけた芭蕉翁が拾って介抱してくれたらしい。泥まみれだった僕を風呂に入れ、汚れた装束は洗濯している。

「ごはん食べられる？ なるべくさっぱりしたもの作っただけだよ」
芭蕉翁は膳を差し出す。香ばしいにおいが鼻腔をくすぐった。ああ、僕は割と空腹だったらしい。食事は残さずすべて平らげた。かつかつと食っていたからか、それを見て芭蕉翁はおかしそうに笑っ

ている。

「すみません、がつついて」

「いいよ。かなりおなか減ってたみたいだね。元気な証拠だよ。安心した」

翁は微笑んでいた。

「それにしても、何があつたの？ ちょっとびつくりしたよ」

「ええ、実は玉霊殿に行つてまして」

僕は玉霊殿のことを話した。妹子が一度殺されたことも、黒猫のことも、心を読む青年がいたことも、すべて。

全部話し終えると、翁は真剣な顔でうなった。

「そつか。猫か。私も少し気になってたんだよね……」

「気を付けたほうがいいですよ。人の心を読むなんて、反則です」

「いや、樂園ならどんな反則や非常識だつて常識だよ。ここには一日七回死んでも生き返る子がいるんだから」

その子も倒されてしまったわけですが。

「うん。コンテ君、できれば、案内してもらえるかな？」

「構いませんが、行くんですか？」

「弟子を探してるからさ。樂園中、探せるところは探し尽くした。あとは玉霊殿だけだよ。それに、心を読むという子にも、ちよつと興味があるしね」

「相当ダメージ食らいますよ」

「芭蕉さんは、だてに古参じゃないよ」

芭蕉翁は頼もしい答えをしてくれた。

芭蕉庵は樂園の辺境にあり、位置的には樂園管理人の住居の近所にある。僕の仮住まいのある日出国とはずいぶん遠く離れているし、もちろん玉霊殿からも同じく。

太陽が昇り切った頃に、玉霊殿に着いた。錆びついた門をこじ開け、ドアを開く。昼間だから、この館はずいぶん明るい。

今度は、猫ではなく、心を読む青年が応対した。

「ああ、昨日の方。……と、見慣れない方ですね」

「初めまして、名も知らぬ新人さん。私は、俳人の松尾芭蕉。この楽園の古参の一人だよ。こっちはコンTEE君」

芭蕉翁はひるむことなく名乗りを上げ、あげくに僕まで紹介してくれた。さすが古参。今更非常識に辟易などしないのか。

「ご丁寧にどうも。僕はヘンリー・コンラッド・ジョアンズ・ヒュースケン、この玉霊殿の主です」

長い名だ。思わず心中でそう思ってしまった、彼から「長いからヒュースケンとお呼びください」とくぎを刺されてしまった。

「それで、何か御用ですか？ ……ああ、立ち話もなんですから、どうぞこちらへ。お茶をお出しします」

ヒュースケンと名乗った彼は恭しく礼をし、僕らを客室へ招いた。出された紅茶は香りがよく、味も悪くはなかった。なんだか、調子が狂う。昨日は僕が勝手に暴走しただけで、落ち着いて話をすればそれほど脅威にはならない相手だったのだ。

冷静になって考え直すと、自分が恥ずかしくなった。

「ヒュースケン君、これは私の個人的な相談なんだけど」

「数年前失踪したお弟子さんの行方を捜しているんですよね」

「ああ、読まれちゃった？」

「一目見たときから、あなたの心はずっとそれだけでしたから」

なんつー古株だ。心を読まれても眉一つ動かさねえ。それどころか笑ってさえいる。まだ若輩者の僕にはできない芸当だ。

「君に心当たりはないかな？」

「ご期待にそえず申し訳ありませんが、何も。なにぶん、ここに来てから間もないので」

「だよねえ……」

ふと、黒猫が客室に入り込んできた。

「ああ、コンTEEさん。昨日はうちのペットが失礼を致しました」
ヒュースケンは頭を深く下げる。

「ああ、いや、いいんだ。僕が勝手に勘違いしたただだから」

「すみません。この子、お客様にずいぶん好戦的で……」

「だから妹子君や平男君も襲ったの？」

「でしょうね。たぶん、訪れる者は皆、僕を害する敵だと思っているんでしょ」

ため息交じりにそうこぼした。猫はヒュースケンの腕の中で丸くなり、客人であるはずの僕らに敵意をむき出していた。

「ところでその猫は？」

「ペットですよ。人の姿に戻ることもできますが、普段は猫です」

「猫の時と人間の時と、どっちが強いのかなあ？」

「探ってます？」

「ううん。単なる好奇心」

「でしたら、実際にご覧になってはいかがです？」

ヒュースケンは立ち上がって猫を抱えたまま部屋を出る。その先は、ロビーだ。ここなら広く、戦闘にも向いているのだろっ、か……

……？ 室内でいいのか。

猫はヒュースケンの腕から離れ、毛を逆立てる。かなり敵意むき出しだな。

弾幕を張り、容赦なく僕らを排除しようとしてくる。

「……！！」

「大丈夫、私から離れないで」

翁はそういつて、手に持っていた扇子をぱっと開く。その扇子で、向かってくる弾幕を叩き落とした。

猫はまた弾幕を張る。今度は叩き落としてもまた起き上がってくる。翁はひるむことなく、扇子を一振りすることに確実に狙ってくる弾幕を落とした。

ばちん、と扇子を閉じる。優しい微笑は、猫にとっては脅威だろう。芭蕉翁の背に隠れる僕は冷静に観察しているだけで、出番はなかった。

「今度は、こっちから攻撃するね？」

芭蕉翁は宙に人差し指で何かを書いた。それは言葉の形をした霊

体だ。

言葉は魔力をはらんでいる。翁はその魔力を駆使した弾幕を使う。

「……水。雨に変われ」

彼の言葉によって生まれた水は雨粒となって、鋭く猫に突っ込む。猫はひらひらとそれを避ける。

「水、今度は雹になれ」

雨粒の刃は雹に変わり、また猫を追いかける。猫はまたかわしていく。

だが、芭蕉翁は猫に休む暇を与えず、水をさまざまなものに変化させて猫を狙っていく。

堂々巡りと思われたこのやり取りは、すぐに終止符を打った。猫が一瞬だけ疲労を見せ、芭蕉翁がそれを逃さず撃ったのだ。

もう爆弾並みの威力を持った水は、猫を容赦なく遅い、ずどん、と音を出して暴発した。

「うわっ」

僕は両腕で顔をかばったが、芭蕉翁は毅然として立っていた。うかがうことのできたその目は、いつもの穏やかで優しい芭蕉翁の目ではない。戦闘をする、忍者にも似た、松尾芭蕉の目だ。

「猫さん、もう終わり？」

爆煙が晴れるのを、用心しながら待つ。向こう側からは、ヒュースケンの「空ー、大丈夫ですかー？」という妙に間抜けた声が聞こえた。

端的にいうと、晴れたそこに猫はいなかった。代わりに、人間の姿をした化け猫が、殺意満々でこちらをにらんでいた。

これが人間の姿か、と僕は一人納得する。ちらっと芭蕉翁を見やるが、彼の顔にあった余裕はすでに消えてなくなっていた。

「……え？」

目を見開いて、持っている扇子を今にも落としてしまいそうなほ

ど、芭蕉翁は動揺している。震えがこちらに伝わってくる。

「翁？ どうしたんですか？」

「うそ……。なんで、君が……」

翁には僕の声が届いていないようだ。

「あなたは、猫のままでは勝てそうにありませんね」

化け猫、空は平然としている。こちらの動揺もどこ吹く風だ。

なぜ翁はこんなにも同様しているのだろう。僕にはそれがいくら考えてもわからなかった。だが、彼がようやく振り絞った言葉で、すべてを察することができた。

「曾良くん……」

曾良とは、芭蕉翁の愛弟子、河合曾良。数年前突如行方を消したという青年。

僕は河合曾良とは、直接のかかわりはない。外の世界にいることが多かった僕は、曾良が翁の弟子になっていることを知らなかった。翁が弟子をとったことを知ったのは、彼が行方知れずになったことを聞いた時と同時だった。

「なんで曾良君がここにいるの……？」

「空、知り合いましたか？」

ヒュースケンは猫にそう聞いてみる。もし翁の言葉が本当なら、化け猫もうなずくはずだった。

ところが、化け猫は翁にとって残酷な答えを出した。

「さあ？」

「……なんで？ 曾良君？」

「誰です。初めて見る顔ですね」

「違う！ 私だよ曾良君！ 忘れたの！？ いくら鬼弟子だからって、師匠の顔を忘れるの！？」

「知らんものは知りません」

「そんな、うそ……」

「では、さっきのお返しです」

茫然自失としている翁など気にもせず、化け猫は弾幕を張る準備を整えた。

さっきまで有利だった立場が、逆転した。たぶん、翁は動揺だけで弾幕を防ぐ余裕を失っている。こうなったら、僕がどうにかするしかない。

僕は腰に下げていた銃を構え、化け猫の放ってきた弾幕に向けて一発二発と撃った。僕の銃撃で弾幕はある程度緩和され、ダメージを受けずに済んだ。だが、これもいつまでも持たないだろう。

僕の銃器に入っている弾はすべて僕の魔力と直結している。魔力があればいくらかでも弾を作り出せるが、逆に言えば魔力が尽きれば弾は作れなくなる。それに、逃げるための浮遊術を使うための魔力も残しておかなければならない。魔力は多く持っているほうだが、それだつていつ尽きるかわからないのだ。何せ、相手は心を読むものとやたら好戦的な化け猫なのだから。

僕は弾幕の相殺で一瞬失われた視界に乗じて、迷わず翁の手をつかみドアを蹴破った。そして地を蹴る、浮遊する。今度は、動揺しすぎて前が見えなくなるなんてことはしない。

「翁、いったん退きましよう。なんだかわけがわからなくなってきた」

芭蕉翁から返事はない。おそらく、考えすぎて僕の声すらわかってないんだろう。

ひとまず、帰郷してから結局一度も帰っていない自分の仮住まいに戻ろうと決め、僕は安全なスピードで飛んで行った。

六、残酷な言葉（後書き）

芭蕉さんが出せましたー！！
そしてヒュースケン君の名前を出せ
ましたー。

七、探しものはどこですか？（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラを『東方』の世界に組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

七、探しものはどこですか？

「空^{くう}」という名は、僕がつけた。

楽園という、世界から切り離されたようなもう一つの世界へと下ってくる前、僕は彼を拾った。

お気に入りの街道をぶらぶらと散歩していたところ、道端に倒れ伏していたのを見つけた。あまりにぼろぼろで、泥と赤黒く変色した血に染まっていて、それでもかすかながら呼吸はしていた。ちょうど折り返して玉霊殿まで近かったのも幸いして、僕は何も考えずにその青年を背負い連れ帰った。

傷という傷はどれも浅く、命に別状はなかったのが少し意外だった。あれほどのぼろぼろ状態だから、医者と呼ぶ必要があるそうだとおもっていたが、装束を脱がして傷の状態などを見たらそれほどでもなかった。むしろ、傷は少しずつ少しずつ回復していき、正直、僕の手当すらいらなかったかもしれない。

意識が回復して彼から話を聞いた。彼は記憶を失っていた。

なぜあそこで倒れていたのかも、自分が誰なのかも、今まで何をしていたのかも、すべて。

ひとつだけ持っていた記憶は、「ソラ」という名前だけだった。

僕は「s k y」という単語をふいに頭に浮かべ、そこから「空」の読みをとって「くう」と名付けた。

空は、僕にとてもよくしてくれた。体が回復してから、僕の身の回りの世話を当然のようにしてくれた。僕はいいというのに、彼は「恩を返しているだけです」の一言で済ませた。

それでいて、妙に甘えたがりだった。三度の飯より甘いものが好きで、よくねだる。そして、暇さえ見つけければ僕にくっついてくる。寝るときは、いつも一緒のベッドで寝ていた。寒い日は、いつも以

上にくつつき虫になっていた。

空が猫の姿に変身できるようになったのは、たぶん呪いなのかもしれない。物心ついた時には、空は猫に化けることを覚えていたし、記憶を失う前の空がもともと持っていたのかもわからない。記憶を失う前から会得していたのか、それとも記憶を失ったからこそ得た力なのか、僕には判断がつかない。ただ猫のままでも、弾幕を張ることは可能で、スペルカードの使用もできるらしかった。

空のことはこれまでにして、今度は僕の事情を確認しておく。

僕はもともと楽園の外の人間だ。だけど楽園へ来た。

その理由は至極単純で、もといた世界にすることができなくなっただけ、である。

僕の左胸の上に浮かぶ目玉は第三の目ともいい、人の心を読む。この力を誰もが恐怖し怯むため、あるものはそれを利用しようとし、あるものは遠ざけようとし、あるものは危害が及ぶ前に配乗しようとした。……まあ、僕の身をどうにかしようとした者たちはみな、空によって痛い目に遭わされた。僕は慣れっこだったから、別にそれほど過剰な反応もしなくていいのにとさえ思っていた。

そう。これが日常なのだ。

利用をたくらむもの、恐れ怯むもの、迫害するもの。そういった連中から逃れ、転々と流浪していくのが僕の常だった。

そういう意味では、楽園は非常に心地がいい。ここでは、空を飛ぶのも猫が人に化けるのも、人が死んで生き返るのも、言葉を見えるものにして攻撃手段とするのも当たり前。心を読むものが一人追加されたって、別に悪目立ちすることがない。

——そういえば。

僕はふと思い出す。

玉霊殿に訪れたものは、僕に会う前に、空に痛めつけられた人たちがいたらしいけど、彼らには申し訳ないことをした。ペットの粗相は主人の不徳だ。謝りに行きたいけど、彼らはどこに住んでいるのかわからないし、行こうとしたらきつと空が危険を察知して止めるだろう。

その中で、僕は、ふと、金髪の黒装束の男性を思い描いた。

短く刈りそろえられた金髪が、妙に強烈に残っているのは、僕の恩師と同じ金髪だからなんだろう。

似ても似つきはしないけど、あの人だけは、僕のところに強く残っている。同伴の翁はおぼろげだというのに。

——あの人と、おなじものを感じたのかな。

あの人を思い出すたび、胸が優しく、とくとくと鼓動を打つ。この鼓動が、はつきりわかるのだ。普段は鼓動なんて気にも留めないのに。あの人を心に思い描くたび、鼓動を認識する。

——これはなんだろうな。

玉霊殿に来たのは、引越しもあるが、恩師を探しに来たという目的も含んである。本当はこのことが最優先事項なのに、心の中はあの人のことではいっぱいだった。

「ご主人様？」

空が、ソファに深く座り込んでボーっとしている僕を気遣う。

「ああ、空。どうしたの」

「いえ、特には。ただ、元気がないようなので」

「大丈夫。ちよっと考え事してただけ」

空は人間の姿でも猫に化けていても、心が読めない特殊なペットだった。僕にとっては、それはある種救いでもあった。じつと第三の目をこらしても、空の心の中は覗けない。

「……空？」

空は僕の膝に頭を乗つけた。膝枕をねだるのは、空が甘えたいときだ。

「どうしたの？」

「別に。何もありません」

「その割には、今日のくつつき虫は通常の三割増しだね」

「人肌恋しい時期なんですよ」

「そっか」

僕は空の頭を優しく撫でる。彼の記憶が戻るよう、僕なりに手を尽くしてはみているけど、一向に戻る気配はなさそうだ。

「空、記憶が戻ったら、いつでも言ってね。君のいるべき場所に、君を返してあげるから」

「記憶は一生戻りません。もし戻ったら、あなたはまた一人になるでしょう」

「またそれか。わがまま言うようなら、今日は別々に寝るよ」
「嫌ですけど？」

空は記憶が戻ることに強い拒否感を示している。それが何を意味するのか、心が読めない相手だからよくわからない。

僕は空の頭を撫でつつ、ぼんやりとさがしものについてふけていた。

七、探しものはどこですか？（後書き）

ヒュー スケン君語りが長い。全話一人称語りで通そう。うん。

ハ、待つ（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラを『東方』の世界観に組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

八、待つ

芭蕉庵。広くて寂しい、私の住処。もともとは、私の仕えていた主人の家で、彼が亡くなつて家主がいなくなつたこの大屋敷を、畏れ多くも奉公人の私が引き継いだ。ただ不思議なことに誰も反対しなかった。この大屋敷には財産的な価値を持つものなど存在せず、主人を取り巻いていた連中にとつては、もうここは用なしだったのだ。その証拠に、私以外誰も住んでいないのだから。

主人と死に別れてから数年。旧友の閻魔大王や、コンテール君と一緒に過ごしながら、俳句も詠まずにたらたら生きている時、私は河合曾良という人間に出会った。

弟子をとるつもりなんてなかったのだけど、彼に一目会つて気が変わった。彼は、死んだ主人の面影を残していた。

きっと、覇気のない私を元気づけようと、あの人が極楽から授けてくれた宝なのだと思った。河合曾良が私に弟子入りしたいと志願したとき、私は迷わず引き受けた。

曾良君は、とても気のつく子で、いつも私のそばにいてくれた。死んだ主人に面影を重ねていたが、徐々に彼そのものを見ることができるようになった。「芭蕉さん」と呼ばれるたびにうれしくなった。同じ屋根の下で暮らしている人がいて、私を呼んでくれる。そんな当たり前のことがうれしかった。

突然、弟子はいなくなつた。そして、また私は一人になった。

「芭蕉さん」

「あ、閻魔君？」

「お茶のおかわり入れようか」

「あ、うん。ごめんね、お客様なのに」

「いーのいーのと閻魔君は笑って台所に行く。一人が住むには広すぎる屋敷に、彼は暇を見ては遊びに来てくれる。」

閻魔君は死者を死後の世界へ連れて行く役割を担っている。だから、彼の仕事場で出会う人間というのはみんな死んでる。彼が言うには、まだ弟子がそっちに行っていないから、少なくとも弟子は死んでないという。

生きているという希望は抱けるけど、どこで何してるのか、さっぱりだ。楽園の管理人に聞いただして見たこともあったけど、楽園にはいないとその時には聞いた。

「鬼男君、お加減はどう？」

「もうすっかり平気。オレの能力と鬼男君の能力って相性いいから余計にね」

「そっか。玉霊殿に行つて、やられたんだっけ」

「うん……」

玉霊殿に行ったものがみんな傷ついて戻ってくるというのは私も聞いている。実際、その屋敷に行ってきた。あながち噂も嘘じゃないさそうだ。平田君もぼろぼろで帰ってきた。妹子君も一回死んで帰ってきた。

玉霊殿の主人は見たところ温厚で好戦的とも思えなかった。ということは、彼のペットという猫がやらかしたんだろう、今までの惨事は。

「芭蕉さんも行ってきたって聞いたけど」

「うん。コンテール君とね。主人のほうはそんな好戦的な人じゃなかった。むしろペットの不祥事を詫びてた」

「どんな人？ オレ、結局まだ行ってないんだよね」

「若い子だったよ。鬼男君と同じくらいの年かなあ。それから、人の心が読めるみたい」

「人の心？」

閻魔君は卓に並べられたお菓子を片っ端から食べるつもりらしい。

もう半分以上封が開けられている。しかもそれほとんどは閻魔君が平らげてる。

「左胸あたりに、赤い目玉があってね。あれが第三の目になって人の心を読んでるようだ」

「なるほどねえ。管理人にチクってみる？」

「管理人はさぼり屋だから行ったところで行動しないよ。それに、この楽園は常識が非常識になるからねえ」

「だよー」

楽園に長いこと住んでる私や閻魔君にしてみれば、ヒュースケンという玉霊殿の主人の能力は驚くに値しない。だけど、私は一つだけ見過ごせない事実をつかんだ。

少し真面目な顔をして閻魔君に向き直る。彼も、察したらしい。お菓子を食べるのを止めた。……もう私の分も残ってないんだけどうちの弟子並みに甘党だな。

「なんか、それ以上に深刻なものでもみつけた？」

「うん。玉霊殿の主人、ヒュースケン君っていうんだけど、彼はペットを一匹飼ってるんだよね。猫。それがさ、人に化けられる化け猫の類で」

「化ける妖怪なんていくらでもいるんじゃない」

「うちの弟子だった」

「……まじで？」

「私のこと忘れてるみたい。かなりショックだった……」

あれだけ似ている他人なんているわけない。それに、猫の時の攻撃や立ち振る舞いを思い出してみると、曽良君そのものだった。私が、間違えるわけがない。

彼の記憶が戻るまでは、ずっとこのままなんだろう。

「芭蕉さん……」

閻魔くんは突然私に抱き着いて頬ずりしてくる。

「え、うわわ、何何？」

「なんか、すつごくかわいそうで……オレも協力する。弟子君が、絶対にこっちに帰ってくるように、オレもがんばってみる」

「ありがとう、閻魔君」

お菓子とは結局、閻魔君が全部食べた。鬼男君が夕方ごろに食材を抱えて閻魔君を迎えに来た。……と思ったら私の家で泊まるようになった。鬼男君は迷惑をかけると言っていたけど、寂しさがまぎれてむしろ私のほうから詫びるくらいだった。

弟子が、元に戻るまで、どれくらい時間がかかるのだろうか。一人にいつまでたっても慣れられない私には、その時が待ち遠しくてならない。

八、待つ（後書き）

今回は芭蕉さん語りです。閻魔さまは甘いのが好きそうだなあ。出してもらったお菓子とか全部食べちゃうんだよ。

番外編、ひっそりと（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界観ぽいものに組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

番外編、ひっそりと

生きるのがつらい。だからと言って、死ねるかといえそうでもない。死ぬのが怖い。結局、私は生きても死んでもいない、中途半端なものなのだ。

閻魔大王に、地獄へ連れて行ってほしいと頼んだら、やんわりお断りされた。しょうがないから自分で死のうと思ったら手が震えてナイフを落とすわロープに首をかけられないわ毒を含んだコップを割るわ大変だった。

グラハム・ベル。それが私の名である。閉じた世界、楽園の住人の一人。たぶん、この楽園で一番生きていてはいけない住人だろう。私は、私が嫌いだ。プラスになるものなど何一つ残せやしない癖に、それでも死ぬのを恐れておめおめと生きている自分なんて消えてしまえばいい。生まれ変わらなくていい。こんな私の記憶がすべて消えればいいのに。

人と一緒にいるのが嫌だ。人気のない場所を探して一週間くらいさまよったが、あまりよさそうな場所が見つからなかった。まったく、なんでこうも楽園には平均的に人が散らばってるんだ。

と、半ば理不尽に切れそうになった寸前、絶好の場所を見つけた。ちまたで噂になってる玉霊殿という大屋敷。

あそこを訪れたものは、みな傷ついて帰ってくる。そのことから、病的な好奇心を持つものを除けば誰も近づきたがらない。だったら、その辺に住めばいい。

虎の威を借る狐と言われても気にしない。人の評価なんて気にしないでもいい。どうせ、私は誰ともかわりたくないのだから。

玉靈殿近くに住みつくと、黒猫が時々私を警戒して弾幕を飛ばしてきたりしたが、自分が何の脅威でもないことをわかってもらうと、何も構わなくなった。玉靈殿の主人は見たこともない。所詮、彼らにとって私はそんな住人なのだ。

案外ここは居心地がいい。誰も干渉してこないから、何も考える必要ないから、わずらわしいことなんて何もない。解放、とはまた違う感じがするけど、ゆったりまどろむには最適の場所だろう。うずくまって眠気に身を任せれば、何も悩むことなく夢の中へ落ちていける。

これが、私の平穏だ。

なのに、君は。

何の前触れもなく。

それを壊していった。

「こんなところで寝てたら風邪ひきますよ」

きっかけは、君のその言葉。

番外編、ひっそりと（後書き）

人物紹介にも出てるのにまだ出てないっておかしいだろ君、ということではわからなくてもベルさんです！ ベルさんのお話は本編とはあんまりからんでこないから番外編扱い……

九、落ち着いて（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界観つぱいのに組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

九、落ち着いて

「ヘンリー・ヒュースケン。外の世界から来た人間。左胸の上に浮かぶ第三の目は人の心を読むことができる。こつちに来たのは、元いた場所に住みつけなくなったのと、人探しのため」

僕の友人、コロンプスはそう答えて僕のほうに向きなあった。さつきまで人違いでもしそうなくらい真面目な顔をしていたのに、今はもういつも通りの友人だ。

「……ってわけだよ。ジョン」

「さすがですね、クリス。外の世界の情報を聞くならあなた以上の人はいない」

「えっへっへー。もつと褒めてー」

「すみませんが、僕は心にもないことは言えない性格でして」

「ちえー。ま、いいや。それよりさ、なんでいきなりヒュースケンのことを聞きたがつたんだ？」

楽園の港近くの酒場。そこはコロンプスの行きつけで、クルーの実家でもある。僕はコロンプスに、酒代をちらつかせて情報を得るため、そこでこうして話し込んでいるというわけ。

「特に意味はありません。ただ純粹に興味があるだけです」

「ジョンの好奇心は尽きるのを知らないからな。いつか絶対そのせいで痛い目見るよ？」

「大丈夫ですよ。いざとなったら逃げるための方法も考えていますので」

「うっわあ、抜け目ねー……」

コロンプスはこれで五杯ほど酒を飲んでいる。あまり金を使わないからいくら飲まれたって大して問題ない。莫大な情報料をふっかけられる外の世界に比べたら、ずいぶんと安いものだ。

「ほかに、ヒュースケンについての情報はありますか？」

「それ以外は特に変なことは何も」

「人探しと言っていました。探している人は？」

「あー、ヒュースケンの恩人らしいよ。なんでも自分をかくまったせいで社会的に追放された人で、たぶんその人もいろんな地を転々としてるんじゃないかな」

「そうですか。ありがとうございます」

僕は財布から適当に札束を取り出し、無造作にコロンブスに差し出した。

「……お釣り、出ちゃうぞ？」

「とつとつ結構です」

時刻は夕方。訪問には失礼に当たらない時間。今からでも、あの子に会いに行く。

退屈ばかりしていた僕にとって、突如現れたヒュースケンという青年は、僕の好奇心を大きく揺さぶっている。

玉霊殿。ヒュースケンの住まい。柵を軽々と飛び越えれば、すぐに扉の前へ。黒猫は敵意むき出しのお出迎えだが、主人が歓迎しているならそれに従わないわけにないかない。

ヒュースケンは、突如の訪問でも快く迎えてくれた。

「またお会いしましたね」

「ええ」

「今、お茶を用意しますので、客室にどうぞ」

前に二度ほどここには訪れたが、その時はどちらも落ち着きがなかったのが問題だった。一度目は、人の心を読まれるという不思議に恐怖を抱いたから、もう一度目はいつの間にか同行した芭蕉翁と黒猫曾良の弾幕勝負のために落ち着いた行動もできなかったから。

僕に必要なのは、冷静さだ。うん。好奇心はそのまま、落ち着きを持って行動すれば、別に危険なんてものは何もない。

「お待たせしました」

「どうも」

ヒュースケンの足元には、いつも猫が控えている。これはあれか。

僕が主人に何かしら変なことをしないかとけん制しているのか。

「……おいしいです」

出された紅茶に砂糖を混ぜ、少しだけすすってみると、思った以上に美味だった。

「それはよかった。……それで、今日は何の御用です？」

「特に意味はありません。急に、あなたに会いたくなった、ではダメですか？」

これは嘘ではない。混じりけのない、純粋な気持ちだ。ヒュースケンは少し驚いた顔をする。

「おかしな人ですね。何かを企んでるんですか？」

「まさか。ただあなたと会ってあなたのお話を聞きたかったから、というのはおかしな人のすることですか」

「そうですよ。だって、今まで僕に接触してきた人たちは、みんな裏がありましたから。……ただ一人を除いてね」

「その人が、あなたの探し人だと？」

ヒュースケンはカップを落としそうになるのをすんでのところで止めた。よほど、驚いたのか。

「本当にあなたはおかしな人ですね。僕の事情まで筒抜けですか」

「いやあ、これは友人から得た情報ですので。差支えなければお聞きしても？」

「……まあ、隠すようなことでもありませんしね。いいですよ」

ヒュースケンは紅茶を一口すすする。

「五年ほど前ですかね。こういった能力があるから迫害も多かったんですが、その時、ある人が手を差し伸べてくれたんです。人が、何の悪意もなく僕に触れてくれたのは、あの人が初めてでした。あの人が僕を引き取って、自分で生活できるよういろと教えてくださいました。あの人がいなければ、今の僕はいないです。でもいつか僕をかくまい育てていることが問題にされて、あの人はいろいろなものを失いました。僕とも離れ離れになってしまって、僕はま

た一人になりました。できることなら、あの人を探し出して、せめてもう一度、一目お会いしたくて、それでいろんな地で過ごしてきました。その途中で、空を拾ったんです。楽園に来たのは、楽園が空を呼んでいたからなんです。空を導くように、目の前には楽園への道が開かれていて……空のけがが治つてすぐ、僕は玉霊殿こちらへ引つ越してきました」

ヒュースケンは茶菓子をかじった。

「その人は、奇抜でおかしな人でした。そして、あなたと同じ色の髪をしていた」

「僕と、ね」

僕は自分の髪をいじってみる。

「ここにあの人がいればいいんですが。正直、探すのは結構体力勝負ですし、今までどれだけの時間を費やしたか、もう覚えていないくらいです」

「もし、楽園にあなたの恩人がいないとわかったら？」

ヒュースケンはふっと笑った。

「そりゃ、ここから出ていくしかないですよ？　ここは居心地がよすぎます。でもあの人がいないんじゃない、意味ありません」

ヒュースケンは、はつきりとそういった。それが道理なんだろう。彼にとって、その恩人とやらは、何者にも代えがたいほどの、人物なのだから。その人に会うまでは、ヒュースケンはずっと各地を流浪していくに違いない。

だけど、それを阻止したいという気持ちがある僕の中にも生まれてきている。彼が、少しでも長くこの楽園にとどまってくれていたらと願う心が育っている。

僕はあわててその心を隠した。隣で話してくれているのは、人の心を読む青年だ。こんな心を暴かれたらたまらない。

「どうか、しましたか？」

首をかしげて上目づかいに僕をうかがってくる。一瞬、どきっとした。

近くでしつかりとみると、まずい。ヒューズケンはかわいい。

会いたくなつたのも、好奇心を上回る、ヒューズケンへの好意が原因なのかもしれずとも。

「あの、……具合でも悪いのですか？」

「い、いや！ なんでもありません！ ああ、それより！ ……見つかると、いいですね。その人」

「……はい」

ヒューズケンは嬉しそうに笑ってうなずいた。笑顔を見ることができたのは、何よりの収穫であるはずだ。なのに、僕の胸はちくちく痛い。

「すみません、急にお邪魔して。そろそろおいとまします」

「そうですか。いつでも、来てください。僕はだいたい玉霊殿にいるので」

「お言葉に甘えさせていただきます」

僕は、ちくちくを抱えながら、家に帰る。

九、落ち着いて（後書き）

やっとともに絡めましたよ、コンテとヒューズケン。二人がくっついて幸せになればいいなあ

番外編二、忘れてほしい覚えてほしい（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界観つぽいところに組み込んだパロです。ついでに番外編なので本編の軸から若干外れてます。閲覧の際はご注意ください。

番外編二、忘れてほしい覚えてほしい

「こんなところで寝てたら風邪ひきますよ」

そういつて、壊れかけの傘を差しだしたのは、汚れた作業を着た青年だった。というか、いつの間にか雨が降っていたのか。何も気に留めていなかったから、気が付かなかった。

膝にうずめていた顔を上げる。際立つて美形というわけではないが、整った顔立ちで、好印象を抱ける者、だと思う。

「ずぶ濡れじゃないですか。僕の家、少し遠いですが、屋根がないよりはいいですから、来てください」

ほら、と何をためらうこともなく私に手を差し伸べてきた。……

なんだ、この青年は。楽園で一番醜い私に触れようとするなんて、よほどの物好きかただのモグリか。

差しのべられた手をじーっと見つめてるだけで何もしていない私を、彼は無理やり引っ張って立たせた。

「ちゃんと立ってください。体力と腕力には覚えがありますけど、傘を差しながらあなたを背負うのはさすがにきついですから」

そう言つて、彼は私の手を離さずそのまま家へと歩いていく。傘は私が濡れないように、ほとんど私のほうへ傾いている。おかげで彼は雨に濡れている。さっきまで平気だった彼の作業着が、どんどんずぶ濡れになっていく。

「工具とかいろいろ散らかってますけど、あまり気になさらず」

いや、気にするつて。私もかつては機械いじりをしていた時期があったから、こういった工具には多少なりとも興味を抱く。どれも床に散らばっているが、本当に危険なものは工具箱に保管してあるようだし、工具はすべて使い込まれているのがよくわかる。

「そつちに、湯を張った大桶があるので、そこで体を洗ってください」

い」

彼の指差すほうには、明らかに大桶じゃないものがある。どう考えてもでかい水槽だろう。いや、浴槽というんだっけ？ 楽園の住人なら風呂のようなものは形違えどみな持っている。が、彼の風呂は何とも斬新というか、……外の世界にありそうな形をしているというか。

雨水でへばりついた装束を何とか脱いで、私は湯船につかる。ちょうどいい温度で、思わず感嘆の溜息をつく。体の芯まで温められていくようだ。

……この浴槽で、溺れ死ぬことは可能だろうか。でも溺死って苦しいらしいんだよな。死ぬなら、楽に死にたいからやめておいた。満足して浴槽から出ると、着替えが置いてあった。サイズは私と同じほど。彼の着替えだろうか。そう思うと、汚物の私に着替えを差し出させてしまつて申し訳なく感じた。死にたい。

「あ、よかった。サイズは問題なさそうですね」

彼の部屋に戻ってくるころには、散らかっていた部屋はすでに片づいていた。どうぞ、と差し出されたお茶を、素直に受け取る。

お茶をすすっていると、ふと、目についたものがあつた。彼は私の視線に気づいて、ソレを私に見せる。

「これが気になるんですか？」

私は近くでそれをじつと見つめてみる。

間違いなかった。それは、遠い昔に私が作ったスクラップだ。遠方の人とも会話できる機械のつもりだけど、ただの粗大ゴミと変わらないものだから作つてすぐに捨てた記憶がある。忘れていたのに、彼はずっと覚えていたのか。その機械を。

「小さいころ、拾ったんです。使い方を探してるうちに、これが遠く離れてる人とお話できるものだってわかって。外の世界へ仕事へ行くのが多かった父とよく会話してました。……その父が戦死してから、もう使つてないですけど」

彼は、目を輝かせて、心底楽しそうに語ってくれた。

「母は僕を生んですぐになくなりましたし、父は仕事で家に帰ることが少なかったから、父と会話できるってわかってすごく支えになったんです。僕がこっちの道を選んだのも、ひとえにこの機械のおかげです。作った人に会えたら、感謝したいな」

「やめて」

初めて、声が出た。今までは彼にしゃべらせっぱなしだったのに。長く閉じていた口をいざ開くのは、結構難しかった。

「それを作った者は決して感謝されるに値しない生物だから。淡い期待を抱くのはやめたほうがいい。だって、そいつはこの楽園で一番迷惑な住人なんだから」

彼は首をかしげつつ私を見つめる。

「……しゃべった」

「は？」

「さっきまでずっとだんまりだったのに。よかった。しゃべれないわけじゃないんですね」

拍子抜けした。突っ込むところはそこじゃないだろうが。

「今日はここに泊まっていてください。雨は止みそうにありませんし、一部屋余ってますし」

おかしな子だ。私の吐いた毒をあっさりと受け流して、私を受け入れる。

「夕食でも作りますね」

そういつて部屋を出る寸前、忘れていたという顔をして、こちらを振り向く。

「僕はワトソンといいます。トーマス・ワトソン。あなたは？」

「……グラハム・ベル」

「ではベルさん、少し待っててくださいね
ドアを閉めた。」

番外編二、忘れてほしい覚えてほしい（後書き）

番外編第二弾というより二話め？ です。電話組の二人はかわいく
ていいですね。

十、長い七日（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラを『東方』の世界つぽいところに組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

十、長い七日

太子の古い友人である竹中さんの家に僕が預けられてはや一週間となった。玉霊殿で黒猫に一度殺された僕は、一晚休めばすぐに体の傷を治せたのだが、太子がそれではだめだと強制的に休ませた。しかも僕の家じゃなく、竹中さんの家に泊ませたのはなんだか狡猾だ。いくら休めと命じられても、あの家にいたら自然と体が仕事を求めてしまう。僕のこういう癖を太子は知っているようだった。あの人は、僕をよく知っているようだ。

「おや、イナフ。早起きだね」

朝、台所を借りて朝食を作るのはもう日課になっていた。竹中さんはいつも僕を妹子ではなくイナフと呼ぶ。彼の頭部が魚類であっても、この樂園では別に不思議じゃない。

「妹子です。いい加減覚えてください」

「イナフ、君は芭蕉翁を知っているね？」

「え？ はい、小さいころから、よくしてくださっている方ですし、太子とも付き合いますし」

「芭蕉翁は言葉を武器にして使う。言霊だ」

「ええ。それがあの人の力ですから」

「言霊というのはね、力だ。言葉に力が宿るのだよ。名前もしかり。名前というのは、その者の命のようなものだ。そのものの名前を知っているというのは、そのものの命を握っているに等しいのだよ。コロンプスが言うにはね、心から信頼しているもの以外には本名ではなく通り名で呼ばせているという地域もあるのだ」

「……はあ。物知りですね、コロンプス提督は。で？」

「私が君の名をイナフと呼ぶのはそういうことだからだい」
ほがらかに微笑んでしめた。

「でも、提督や太子や芭蕉さんは本名で読んでましたよね？」

「呼び間違えたんじゃない。誰も知らない通り名で呼んでいるだけだ」

「呼び間違えじゃねーか」

この人は本当に強がりだ。以前、木に登って降りられなくなったとき、降りられなくなったのではなく思ったより高かったただけだと聞いてもいないのに言い訳した。

「今日は鮭か」

「ええ。味噌汁は豆腐とわかめです。卵焼きは砂糖入れますけど」

「うん。甘いのは嫌いじゃない」

「……というか、魚、食べるんですか」

「イナフ、好き嫌いはよくないよ」

「いや、わかってますけど」

彼の頭部にあるアレはどういう構造してるんだ。あれは、魚だよね？

朝食を終えてまったりしていると、思い出したように竹中さんは言う。

「ああ、そういえば」

「なんでしょう」

「今日、太子が来るって」

湯呑を落としそうになった。が、すんでのところでとどまってよかった。

「太子が？」

「うん」

机に頬杖ついて僕を見つめる竹中さんは、楽しそうに笑っている。「元気になった姿を見せてあげなくてはね」

「はい」

それから、僕は何をするにもうつきしていた。あの人が、会いに来てくれると聞いただけでこんなにも僕は浮かれることができるらしい。

竹中さんの家に預けられて一週間経つけれど、その間、僕は太子の顔を見ていない。

いつも、ずっと一緒にいたから、ほんの少しの間でもあの人を見ることがないなんて今まで考えたこともなかった。人は、わかれて初めて本当に大切なものを知るといふ。そんな馬鹿なと思っていたが、身をもって知ることになるとは思わなかった。

太子は、優しい。穏やかで、慈しみがある。だから僕が失態を犯してもきつと許す。それどころか、そんな場所に向かわせ自分を死なせたことを悔いるだろう。あの方は、そういう人だ。あの方の一番近くにいた僕は、それを知っている。

だけど、この一週間、不安にさいなまれたのだ。自滅とはいえ、一度死んで、あの方の足を引っ張ってしまった僕を、あの方は、どう迎えてくれるのかと。

竹中さんは心配ないと言ってくれた。だったらいいんだけど。本能が告げる不安というのは、理屈や言葉では拭い去れない。心を救えるのは心だけだ。

平常心を保って洗濯物を一通り干し終えた。ここへ来てからというものの、仕事から離れたせいで手持無沙汰になった僕は、暇をつぶすために家事を自然とこなすようになっていった。竹中さんから主夫と絶賛されたが嬉しくない。僕は主夫じゃない。遣隋使で、あの方の忠実な部下だ。

「……」

前方遠くから、聞き慣れたを通り越して聞き飽きた声が、わずかではあるが聞こえた気がした。

洗濯物の陰から顔を出してみると、今度はさらに鮮明に、耳に響いてきた。

「いもこー」

いつもの青装束が、目立ってしょうがない。無邪気な顔が、走っ

てこっちへ近づいてくる。僕の不安なんて知らないあの人は、最終的に飛んで僕に抱き着いてきた。

「妹子おおお！」

「うっぎゃあ！」

地面はクローバーで埋め尽くされていて助かった。痛みは緩和される。

「一週間ぶりだー。会いたかったよー！ 馬子さんが全然離してくなくて……妹子のいない一週間は休みなしだった」

「そりゃあんだ、いつも仕事逃げて好き放題やってるツケですよ」

「うるさーい。だから妹子に早く会えるように言われた仕事全部三徹でやってきたんじゃーい」

太子はすりむけるくらい頬ずりしてくる。クローバーだらけになるのも、ここが外なのも気にせず、僕を離さない。

不安は、僕でさえ苦労した僕の不安を、太子は、いともあっさり消してくれた。

「太子、それではイナフが大変だよ」

「あ」

竹中さんに言われて、太子はようやく離す。その後、竹中さんの家に通されて、のんびり話を聞いた。

この一週間で三徹は本当の話だった。おかげで一週間という短い期間で太子は山のような仕事をやり遂げ、馬子様の許可をもらってここへ来たのだという。きっと、馬子様は驚いているだろうなあ。ここまでがんばる太子を見るのは貴重だったろう。

「妹子、帰ろうか」

「はい。……竹中さん、一週間お世話になりました」

「うん。仕事に疲れたら、いつでもおいで」

そうして、僕らは日出国に戻った。

十、長い七日（後書き）

妹子の話になりました。竹中さんと馬子さんは二人の仲を取り持つてくれたり助けたりしてくれたりする助演男優的なポジションだと信じて疑わない。

十一、退屈（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』っぽく世界観に組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

十一、退屈

玉靈殿を樂園に移しても、僕の生活はそれほど変わらない。

屋敷内のこととは空がほとんどやってくれるし、恩師の消息をたどるのも、空が引き受けてくれている。必要なものがあるときは、空が外まで買いにでかけていく。

つまるところ、僕にはすることがないのだ。それどころか、樂園に来てからというものの、玉靈殿から一步も外へ出ていない。だからか、樂園がどういふところなのか、ちっともわかっていない。時々、奇特な人が遊びにくるが、だいたいいつも一人だった。

その奇特な人というのは、恩師と同じ金髪の人、確かコンテーと名乗っていたひとだ。古参の芭蕉という人と一緒にここへ来てから、玉靈殿に興味を持ったらしく、暇を見つけてはここへ来る。

「僕は、樂園の外へ行くんです」

彼は、自分のことをそう話した。閉じた世界から外の世界へ行つて、いろいろと役割を果たしているのだそうだ。樂園のことにも詳しく、ほとんど閉じこもりがちの僕に、いろんなことを話してくれた。

日出国のこと、芭蕉翁の弟子のこと、その弟子が空にそっくりなこと、キャプテンのこと、冥界のこと、電気工のこと——外の世界のことも、話のタネは尽きなかった。

「君は、外へ出ないのですか？」

そう問われて、僕はうなずいた。出る必要がないから、不足は、空がすべて補うから、わざわざ靴を履いて外へでる必要がないのだ。「それはもったいないなあ」

彼は本当に残念そうにつぶやいた。必要性を感じなくとも、外を自分の目で見るのはいいことだと。だけど、僕はあまり気のりしな

かった。なぜだか、外に出たいという欲求や、出てもいいかという楽観的な感情が、欠落していたのだ。

「紅茶、もう一杯もらっていいかな」

彼はカップを持ち上げてそう頼んだ。僕はうなずいて、温まった紅茶を注いだ。なんだか、僕の入れた紅茶を気に入ってくれたようだった。

僕の恩師のことを話すと、親身にうなずいてくれる。

「見つかるといいね」

そう、言った。心をちらつと覗いたら、それは本心からの言葉だった。

悪い人ではない。親切だし、裏表のない性格してるし、僕のせせこましい世界を、広げてくれる。

だが、空はいい顔をしなかった。むしろ、空は彼を嫌っているようにも思える。その理由はなぜだかしっくりこない。教えてはくれたのだが、

「別に。生理的に好かないだけです」

と答えるだけだった。

僕は今日も、玉霊殿で過ごしてばかりだ。少し涼しくなった朝、布団から出るのが億劫で、くっついて寝ている空（人の形に変化している）にしがみついて離れなくなかった。猫の状態でも構わないのだけど、人の形に戻るとその分温かさが増す。

今日は、珍しく僕が先に起きた。いつもは空が先に起きて、僕をのんびり起こすのに。目の前には、静かに寝息を立てる空が横になっている。戯れに、第三の目で心を読んでみるが、彼の心は濃い霧に包まれていて、わからない。

寝たふりでもして、空が起きるまで布団にしようか。外に出るのは、めんどくさい。

「お目覚めでしたか」

「あ」

空が起きた。空も寒さに答えるらしく、くつつき虫三割増した。

「一日中、こうしてる？」

「いい案ですね。しかし、僕は一日に三回お菓子を取らなければイライラするので」

「甘いものばかりは体に毒だよ」

「その分、健康なものを食べてます」

空は三割増しのくつつき虫を僕で充分に堪能し、もぞもぞと布団からはい出た。

「すぐに、食事の用意をします」

「うん。……あのさ、空」

「なんですか」

「外、出たいな」

明らかに、空が反応した。心が読めない分、彼は感情が高ぶったり動揺したりすると、決まって体に出やすい。これはこれでわかりやすい。

「……どうしてです？」

僕に背を向けたまま、やけに低い声で聴いてきた。

「別に、理由はない」

「なら、別にいいじゃないですか」

「うん。言ってみただけだよ」

「そうですか」

空は部屋を出て行った。

外は危険が多い。特に僕は、第三の目のために他人から悪意を受けてきた身である。その事情を知っている空は、僕の安全に敏感になりやすいのだ。

僕は自分の身を守る程度には戦えるけれど、戦闘のプロと対峙したら、きつと無事ではない。楽園には、戦いなれた人たちが大勢いる。コンテという人もそう。あの人は、戦闘に身を投じてきた経験が多いらしい。今思えば、戦ったら危ない人を隣に、僕は話をし

てきたことになる。

僕は、別に玉霊殿があつて、ついでに恩師の行方が探せばいい。それ以外は、いらない。

それなのに、なぜ外に行きたいなどと口走つたのだろうか。コンテーに、影響されたのか。僕は空に呼ばれるまで、その辺を考えつつ、布団の中にもぐりこんだ。

十一、退屈（後書き）

ヒュースケンとコンテーマインのはずですが、二人を軸にいろいろ書くってのは難しいですね。楽しいですが、思い通りにかけないともんもんしますorz 二人がじょじょに近づいていく過程って書くのが難しい！

十二、井戸端会議（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界観っぽいところに組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

十二、井戸端会議

……なんだというのだ。僕は、玉霊殿からの帰り道、そう思わずにはいらなかった。

玉霊殿の主人であるヒュースケンは、ここへきてから一度も屋敷の外を出たことがないという。それは本当にもつたいのないことで、楽園の住人として明らかに損をしている、ように僕は思えた。

だから、おせっかいとはわかりつつも、彼を無理やりにも外へ連れ出そうとしたら、人間に変化した化け猫に、冗談ではすまされないくらいの脅迫を受けたのだ。

「あまり、主人をたぶらかさないでいただけますか」

僕ののど元に突き付けられた手刀は鋭く、断罪されたらけがですまされないだろう。結局、僕はヒュースケンを外に連れ出すのを断念した。が、あきらめたわけじゃない。

ただ、厄介な従者がいるだけだ。

「それは災難だったねえ」

芭蕉庵にて僕はことを話す。ここにいるのは、主人の芭蕉翁のほかに、日出国の聖徳太子と従者の小野妹子、それから外のことだけは一番物知りなコロンブス。ここにいるものは皆、何かしらの目的や心を持つて玉霊殿に興味を持っている。太子は妹子を殺した猫への恨みから、妹子は太子についてきただけ、コロンブスはただの興味本位。

「笑い事ではありませんよ。ただの余計なお世話だったかもしれないが、一步も外に出ないのはあまりに異常です」

「物事を君の価値観だけで決めるのは早急だとは思っよ」

芭蕉翁はそういさめて茶をすすする。

「だけど、確かにとじこもりつきりなのは、私もあんまりいいとは

思えないな」

「ですよね？」

思わず、机から乗り出した。

「なんというか、排他的ですよね。警戒心が強いのでしょうか」

そう聞いたのは、妹子だった。一度屋敷へ訪れて、足を踏み入れたら一度死んだ。あれから彼なりに反省したらしく、玉霊殿の情報を集めて自分なりに分析したらしい。

「楽園は、楽園を害なす者でない限りすべてにおいて寛容です。それを理解してもらえないのでしょうか」

「充分害なしているだろう」

妹子の悲しげな声に、太子は厳しく答えた。

「まず何の罪もない妹子を傷つけたのが許せん」

……扉を強引にこじ開けて壊したのは罪にならないのだろうか。

「それにだ。訪れた客をまともにもてなしもしないで一方的に追い払うのは、どうだというのだ。今は主人が丁寧に應對しているが、ペットのしつてもできないようではそいつもたかが知れているな」

「太子、そこまで仰らなくても。僕はもう治ったんですし、対応は改善されているようですし」

「だがな妹子、おまえがよくても私は許さん。しかるべき罰は受けさせる」

ここにいるものの中で、太子が一番過激だった。機会さえあれば行き過ぎた断罪だってやってのけるだろう。普段はろくすっぽ仕事もしないで遊んでいるくせに、やるべきことはやり、自分の大切なものを傷つけられたらそのままにしておかない。為政者がそれでいいのか悪いのか判断しかねるが、こういうものなのだ、聖徳太子は「なー、オレさ、クルーたちに手伝ってもらって、今の玉霊殿の情報をもらったんだけどさ」

さっきまで茶菓子に食いついていたキャプテンが、突然拳手をした。

「何か、気になる情報でもあったの、コロちゃん？」

「コロちゃんと言つな。別に気になるほどでもないけど……。本当に外から一步も出てないらしいな、あの主人。買い物とかは全部あの猫が引き受けてるらしいよ。だから外に出る必要ないんだって」
「クルーたちの情報なら、間違いはないんだろうね」

コロンブスの部下である船員たちは、玉霊殿内の情報をすべて把握でき、共有する。ある意味監視されていると思つていても差し支えないが、基本クルーは愛郷心があるので、同郷には甘い。

「ヒュースケンもさ、それを苦に思つていないし、姿勢を変えるつもりはなさそうだな」

僕の茶菓子に手を出しているのがもろにバレバレだが、情報料代わりに黙つて見過ごしておいた。

「まー、あんだだけ迫害されりゃあねえ。閉じこもつていたくもなるのはわかるけどねえ……」

「だからと言つて、妹子を殺していい理由にはならん」

「いや、ソレは猫のほうでしょ……。これはオレの見立てだからアテにはならんけど」

「じゃあ言わなくて結構です」

「聞いて！」

妹子の冷たい返しにめげず、キャプテンはちゃんと話す。

「あれ、猫からどうにかしたほうがいいんじゃないの？」

「ふむ。そうだな。やっぱり猫だから水責めで行こうか。そのあとは沼に落として溺死寸前で引上げる。そのあとは鞭打ちか」

「そーゆー意味でのどうにかするじゃないって!!」

太子の考えはどんどん過激になっていく。猫よりも、太子のほうをどうにかしたほうがよさそうだな。

「で、コロちゃん？ どうにかというのはどういう意味でのどうにかなんです？」

「妹までコロちゃんてゆー……。いやさ、あの猫、ヒュースケンから引つpegしたほうがお互いのためだと思う」

妹子は太子の過激な発言をたしなめつつ、コロンブスの言葉をじ

つくり考えた。僕も、ぬるくなったお茶を飲み干して考え込んだ。

あの猫は、芭蕉翁の弟子、河合曾良に似ている、という。猫本人は覚えていないらしいが、ヒュースケンによると外の世界で死にそうだったのを拾ったらしい。おそらく、あの猫は記憶を失っているだけで、河合曾良本人だ。瀕死の状態だった自分を拾った恩返しにしては、ずいぶん盲目的な服従だ。違和感が残る。

あそこまで病的に献身なのは、いいとは思えない。

「……猫は、私が何とかするよ」

沈黙を通していた芭蕉翁が、そういった。その顔には穏やかな表情はすでになく、まじめで真剣さを浮かばせる。

「できるのですか、芭蕉翁？」

「できなくてもやらなくちゃね。弟子の非行は、師匠が責任持たないと」

ふっと微笑んだ。楽園の古参の一人は、これほどまでに頼もしいもののなか。

「だから、ヒュースケン君のほうは、コンテー君ががんばってね？」

「私もだ！ 自爆させる！」

「とりあえず太子は黙りましょうか」

相変わらず物騒な解決方法しか提案を出さない太子は、妹子の鉄拳によって静かになった。

興味を持ち、外に連れ出したくなるほどに気になる相手だ。僕が何とかする。

おせっかいでもいい。余計なお世話でもいい。だけど、楽園を見ずに玉霊殿に閉じこもっているのは、楽園の住人として見過ごしたくはないのだ。

「オレ、ヒュースケンの外にいたころの情報集めとくー」

気の抜けた声でコロンブスはそう言い、僕はそれを聞いて喜びうなずいた。

十二、井戸端会議（後書き）

そろそろ佳境かなー？ 最終的にどうするかは決めてあるんですが、真ん中の話はあるまり考えてないんですよ……だから中間の話はみんなぐだぐだorz

十三、古参の実力（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラ達を『東方』の世界観
っぽいものに組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

十三、古参の実力

最近、やけに玉霊殿を訪れる人が増えた。楽園へ来てから、僕は確実にそう感じていた。

主人、ヒュースケンは賑やかになっていいことだとのんきなものだったが、ペットの僕にしてみればこれはある種の危機でもあった。我が主人ヒュースケンの能力、人の心を見透かす第三の目。これは外の世界では決して受け入れられることがなかった。あの人の迫害の歴史は、ぽつと出の僕が語れるようなものじゃない。

それでも彼は、笑って過ごしてきたのだろうか。恩師にもう一度だけでも会うという、叶いそうもない願いを抱きながら。

最初に来た遣隋使は、居留守を決め込んだらドアを蹴破って無理やり侵入してきた。だから迎え撃った。拳法家と言っていた男は何もしていないが、脅威になりえるからしばらく戦えないようにつぶしておいた。褐色肌の鬼は、冥界の王の差し金によって仕向けられた。もしかしたら、冥府に送られるかもしれないという危機感から、脅迫も込めてコテンパンにしておいた。

空^{くう}という名をつけてくれた時から、僕はヒュースケンに付き従うことを決めた。名をもらうことは、命をもらうことでもある。あの人に会うまでの記憶が欠如していることになっている僕は、どうして言葉や名に重さを実感するのかわからなかった。だけど、名前をくれたあの人は、僕にとって特別だった。

今日の客は、松尾芭蕉。この楽園の古参の一人で、だてに長年この世界で生活していない。以前、弾幕勝負をしかけたことがあったが、あれは芭蕉が動揺して隙だらけにならなければ負けていたのは僕だった。

玄関で応対して、見ているぶんにはまだ人畜無害だ。

「お邪魔していいかな？」

「主人はいま体調不良で寝ているのですが」

「あ、大丈夫。今日は君に用があるんだよ」

芭蕉はにつこりと笑ってそう言った。

「僕に？」

理由はわかる。彼が言うには、僕はこの古参の弟子なのだそうだが、主人からの記憶のないらしい僕には正直どうでもいいことだった。だが、主人からは、「お客様が来たらちゃんと丁重におもてなしなくちゃだめだよ」とくぎを刺されている。主人の言葉に従わないというわけにはいかない。大変不本意ではあるけれど。

応接室に案内して、適当に緑茶と和菓子を持って行った。お茶はともかく、お菓子はぜんぶ僕のだ。

「うん。おいしい」

芭蕉翁はお茶をすすってそうつぶやいた。

「ウチの弟子の入れたお茶と、味が同じだよ」

「年寄りは何を飲み食いしても同じ味しかなさそうなものですがね」

「ひどつ。松尾はまだまだ現役だよ！」

「ジジイはみんなそう言います」

「ほんとひどいな！ 口の悪さも弟子そつつつくりだよ」
かなりためて言い切った。

「他人の空似でしょう」

「ここまでよく似てると、同一人物なんじゃいかな？」

不意に、お菓子を取る手が止まる。すつとぼけているのは演技で、本当はかなり考えている。さすが古参、だてに年は取っていないようだ。あなどれない爺だ。

「何度も言っているでしょう、僕はあなたの弟子じゃありません」

「記憶がないからそういつてるんでしょ？ 戻った記憶には、私に

弟子入りしたことが含まれてると思うな」

「……どうしても僕をあなたの弟子とつなげたいようですね。非常に不愉快です」

「本当のことだもん。君は、間違いなく私の弟子だよ」

「根拠は？」

芭蕉翁はふつと笑って、懷から紙と筆を取り出した。そして、何かを書きつける。

筆を止め、一つづなずいた。その紙を僕に渡した。描かれたものは、ただの字だ。

「これを何と？」

「読んで？」

「……河合曾良。あなたの弟子の名ですね」

すると、文字は紙から浮かび上がり、ふわふわと宙を泳ぐ。それらは、僕の周囲を漂っている。

「なんです、これは」

「言葉が、伝えてくれるんだよ。私はね、言葉を通して真実をつかむことができるんだ」

「そうですか」

「言葉はね、君が曾良君だって、言ってる」

「バカが……」

だけれど、なついているようにも見える言葉を、僕は振り払うことができなかった。

「曾良君、結構頑張ってたみたいだけど、私にはごまかせないよ？」

につこりと笑顔でそう僕に迫るこの古参は、確実に計算でやっている。おそらく、僕のこととはすべてお見通しなのだろう。これ以上の追及は、自分を見失わせるだろう。

「さすがですね、芭蕉さん」

僕は、白状した。

十三、古参の実力（後書き）

細道二人組は、あとちょっと続きます。そのあとに、コンテとヒースケンのお話にしますです。

十四、解放（前書き）

このお話は『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界観に組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

十四、解放

ようやく、弟子は白状した。ずっと白を切りとおすようだったから、長期戦も覚悟していたけど、思ったよりあっさり崩れてくれた。最初から、私は空と呼ばれたこのペットが、河合曾良本人だと信じて疑わなかった。黒猫が曾良君に戻ったとき、とてつもない衝撃に襲われたものだ。しかも、本人が、師匠を目の前にして誰だなんていうものだから、呆然として目の前が真っ白になった。

だけど、よく思い返してみると、落ち着いて考え直してみると、やっぱり彼は私の弟子だったのだ。動揺すると当たり前のことも分からなくなってしまうのはどうやら本当だったようだ。私も、コンテー君を笑えない。

記憶がない、という名目はずいぶん都合がいい。今まで自分の歩いてきた人生をすべて抹消して、新しく生きなおすということができるから。曾良君が、記憶を失っていたというのは本当だろう。だけど、玉霊殿が楽園に出現した時にはすでに記憶を取り戻していた。彼に漂う気から、なんとなくではあるけどそう考えていた。

そうしてずっと、「記憶が戻るまでの間」は、ヒューズケン君のそばに使えることができる。もともと戻った記憶を隠して、ずっと記憶喪失のふりをしていれば、ずっとヒューズケン君と一緒にいられるというわけか。私の弟子は、相当頭の切れる者だったらしい。

だけど、私にもまだわからないことがいくらかある。どうして行方不明になったのか、どうして、記憶を隠してまで玉霊殿の主人のそばにあらうとしたのか。

「答えてほしいな。突然行方をくらましたのはなんで？」

「大したことではありません。楽園の結界のわずかなほころびから、

単なる好奇心で外に出てしまっただけです」

「じゃあ、そういうことにしようか」

それがすべて真実とは、私には到底思えない。彼はうそをつくコツをあまりわきまえていない。

この楽園の結界に不備はあり得ない。外の世界へ行く住人もいるから、その時は決まった時間の決まった場所にだけ、結界を解くことがある。この結界を解く役目を持つのは、楽園の管理人である増田だ。

彼は本当に優秀な管理人で、一度として結界を崩したことがない。その人が、偶然でもなんでも、わずかにでもほころびをきたすような失態を犯すとは思えない。

曽良君は、うそをついている。だけど、心の広い師匠はそれをあえて不問にした。私は別にそんなの気にしてない。

「もう一つ。記憶喪失のふりをしてまで彼に付き従う理由は、なに？」

私が気になっているのは、これだけだ。ある程度の予想はつくけれど、これは弟子本人の言葉で聞かなければ私の気が済まなかった。向かい合って座る弟子は、あっけらかんと答えて見せた。

「恩があるからです。外に出て、死にそうだったところを拾ってくれたのが彼でした。僕はそこで命を救われました。名もいただきました。僕にとって、あの人は恩人です」

「だからかいがいしくしたがって、彼の安全を確保してると、そういうわけ？」

「ですね」

「師匠をほったらかしてまで？」

「はい」

納得いったが割り切ることにはできない。私は曽良君がこつちに戻ってきてくれることを望むから、曽良君が玉霊殿に居続けてほしくなかった。

「君がここにいてことで、ヒューズケン君を守れると思ってるんだ

ね」

「楽園ならば外ほど迫害もないでしょう。しかしゼロと言い切れませんので」

私は、結構意地悪な笑顔をしていた気がする。

「曾良君、君は何もわかつちやいないんだね」

無表情だった曾良君の顔が、わずかにゆがんだのを見逃しはしないよ。

「言わせてもらうとね、君の存在はヒュースケン君にとって邪魔でしかないんだよ」

いつの間に私は意地悪になったんだろうね。たぶん、弟子をとられた腹いせなんだろう。

「玉霊殿の噂、知ってるよね、当事者だもん。ここに近づいたものはみんな傷だらけで帰ってくるってやつ。今はもうそれほどの力もない噂だけど、玉霊殿が来てすぐのころはみんなその噂におびえていた。だって妹子君が一度殺されて帰ってきたって証拠が残ってるからね。それに腕つぶしには覚えのある鬼男君や本職ではないにせよ強い部類に入る平田君もボロボロになって帰ってきた。この噂におびえていた住人達はどう思ったかわかるよね？ あそこに近づいてはいけないと防衛本能が働いた。つまり、君が客人に無礼な態度をとったせいでヒュースケン君は迫害されてはいないにしても楽園からつまはじきされた状態になったんだよ」

それでは、意味がないのだ。迫害のない桃源郷を求めてここへ来たヒュースケン君は、遠ざけられるという方法で迫害されることになったのだ。

「ヒュースケン君を害なす人から守るという理屈はわかる。だけど、君のやり方では、かえってヒュースケン君を孤立させ、外にいたころとなんら変わらない状態に陥るってのは頭のいい君ならすぐにかるよね？」

「……」

「それを知っててなおやり続けてるっていうなら、師匠としていくらでも口出しさせてもらうよ」

「……知っていましたがとも。あの人がこの館に閉じこもっていれば、あの人とは誰とも会うこともない。僕以外の住人と交流することもない」

「そうして独占したかったのは、彼に対して恩以上に情を抱いたからだね？」

「さすがですね、芭蕉さん。あなたは何でもお見通しなわけですか」
「そうだよ。だから、観念して私のところに戻ってきなさい。今なら松尾の鍛えた断罪チョップ一回で許してあげるから」

「あなたの断罪など怖くもないのに」

曾良君が立ち上がる。いつの間にかその右手に握られていたのは一つの弾幕。

躊躇もしないで、こちらに放ってきた。私は、それを扇子で受け止める。ほんと迷いが無いな、わが弟子ながら。

それが、勝負の、合図。

十四、解放（後書き）

あれ、まだ終わってないや； 思ったより長くなりそうなのでもう一遍くらい書いて次にヒューズケン君とコンテーの方に移ればいいな。

十五、和解（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界観つぱいのに組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

十五、和解

相手は曾良君。私の弟子。さすが松尾に弟子入りしていた子だ。私に似て強い。楽園から離れていたとはいえ、腕は鈍っちゃいないみたいだ。

曾良君の戦法ならすぐにわかる。勝つためには、私に弾幕を張らせないようにすること。だから先手を打って、私から攻撃する余裕を奪っている。隙間を見つけるのがやつの厚い弾幕は、私にとつては扇子で叩き落とせばいいだけだ。だけど、反撃の隙がない。相当本気を出している。

曾良君は、本気で私にかかってくる。それがなんだか、嬉しいような楽しいような。

「何笑ってるんですか」

曾良君はまた弾幕を張ってくる。これがまだ通常弾幕だったんだから、スペルカードを使われたら、さすがの私も被弾しかねない。私は扇子を呷ぐ。よけきれない弾幕は扇子で全部叩き落とす。だんだん、叩き落とさなきゃ対処できないくらい面倒になってきた。本気通り越して殺意まで感じるんだけど、さすがに錯覚だよね？

「さすが……」

「口を開く余裕があるなら、もったときついものを出しても問題ありませんね」

ようやく、というか面倒なタイミングでスペルカードを出してきた。全体に、ゆっくりと近づいてくる弾を張って、もう一つの、ぐるぐる回る弾を撃ってくる。これも扇子で叩き落とす。

だけど、さすがの私も限界だ。これ、叩いても叩いても新しい弾

が出てくるのなんの。全体に張られた針のような弾に構ってばかりで、私は近づいてくるもう一つの弾幕に気が付かなかった。

「……あ」

被弾した。一瞬だけ、曽良君と目があつた。

笑ってる。底意地の悪い笑顔で、私を見下ろしている。

一つ聞きたいなあ。その断罪の手は、何の意味を成してるの？

被弾だけですまなかつた。ぐるんぐると近づく輪が、私にあたつてすぐ、爆発した。

爆風に吹つ飛ばされ、私は壁に背中を打ち付けた。衝撃に、咳き込んだ。私の動きが、鈍る。目の前に迫っていた本命の攻撃を、扇子で叩き落とすことさえできなかつた。

あのスperlカードも、爆発つきの車輪弾幕も、すべては、捨て駒。本命の弾は、ここだつたんだ。

まともに食らった弾は、重たいダメージを私に与え、ついでに肋骨の三本くらいは持ってかれた気がする。扇子ではじくこともしなかったから、ダメージの軽減なんてできやしない。壁に背を預けてずるずる座り込む。

曽良君、私の見ないうちにこんなに賢くて強くなつてたんだね。それが今はなんだか素直に喜べないよ。なんでだかはわかるでしよう？

目の前には、見下したような目で私を見下ろす弟子が建っている。その目、師匠に向けるような目じゃないよね？ バカにされてるよちくしょう。

「なんというざまでですか。それで僕の師匠を名乗っていたと？」

「はは……腐つても師匠だもん」

「あなたの命は一度きりです。ここで終わりにしましょう」

「まだだよ。まだ、私にはカードが残ってる」

曾良君の目が、少し揺れた。

「君が師匠を本気で殺ろうとしてまでヒューズケン君をかばうのは

……彼を慕っているからでしょう？」

「……そうですよ」

「慕情を抱くなどとは言わない。だけど、私は歓迎しないな」

今の曾良君は、昔の私に似ている。って言ったら、断罪されそう
だ。

かつての私も、死んだ主人を追ってばかりだった。後追いとかの意味じゃなくて、誰か、誰でもいいから、あの人の面影をずっと求めていた。死人のことばかり思つて、生きている自分がどうでもよくなつていた。友人にさえ、あの人の影を見出した。かなり重症だったようだ。

そんなとき、私は曾良君に救われた。最初のうちは、同じこと繰り返してはいたけど、徐々にあの人の死を受け入れて、割り切ることができた。

「君の慕情はね、決して君たちのためにはならない」

「説教ですか」

「経験者だから言つんだよ。曾良君のヒューズケン君に対する感情はね、ただ代わりが欲しいだけだ。本当に慕っている相手には自分の思いが届かないから、ヒューズケン君にぶつけて満足してるだけ」

「……死にかけのジジイは口が減らないようですね」

「わかつてるんでしょう？ 自分のしてること。ヒューズケン君をわざと孤立させて自分だけのものにしてること。それが何の得にもならない。ヒューズケン君を苦しくさせてるって……わかつてるんだよね！？」

「うるさい」

振り下ろされた手は、私には届かない。届く前に、私が扇子で受け止めたから。

十五、和解（後書き）

終わる終わる詐欺もここまで来るとはなはだしいですねー；

十六、ひとりだち（前書き）

このお話は『ギャグマンガ日和』のキャラたちを『東方』の世界観
つぽいのに組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

十六、ひとりだち

弟子の断罪の一手は、扇子でどうにか受け止めた。それでもダメージはじんじん響いてくる。記憶を失っていた間のブランクはなさそうだった。直に受けたら、私は間違いなく沈んでいた。

曾良君の舌打ちが聞こえた。この一撃から辛うじて逃げられたことは相当痛手のようだ。

「……ジジイ」

「まだ現役だもんね」

ぼろぼろでも、まだ私には言霊がある。言霊を紡ぐ気力が残っているなら、まだあきらめる必要はない。笑うのは、自分を奮い立たすため。どんなに傷ついても君に立ち向かうのは、君を叱るため。

「今度は私の番だね」

断罪の手を扇子でいなしでどうにか立ち上がる。弾幕で傷ついた体でもいい。言霊を紡ぐことができれば、それでいい。

血に染まった右手を振りかざして、震える手をどうにか抑えながら文字を書く。宙に書かれた「風」の一字は、どす黒い血で染まっていたが、私の息吹で本来の色を取り戻す。ふわふわと飛び回り、そうして曾良君を私から離れるように仕向けてくれた。

「風……力を私に貸して」

言葉として紡がれた風は、私の言葉に従ってくれる。ふらふらしている私の支えになり、曾良君から攻撃されたときのために淡い壁を目の前に作ってくれた。

「本領発揮ですか」

「そうだよ。俳聖松尾芭蕉に喧嘩売ったツケ、払ってもらうね」

曾良君は防御に専念することにしたようだ。それがありがたい。正直、私にとって防御はないに等しい。言霊だから、その力をうまく引き出せばどれほどの固い壁も打ち破れる。回避行動なら、曾

良君にとってまだよかったかもね。

言霊によって生み出された優しい風が、屋敷全体に漂うのを、全身で感じ取る。ヒュースケン君に危害を加えないようさりげなく守り、私に懐き、曾良君に敵意を差し向ける。

「風……蝶となって舞え。未熟な楽園の住人に、教育的指導！」

私の掛け声で、風が無数の蝶に変化する。もえぎ色の蝶が、ふわふわと、曾良君に向かって飛んでいく。蝶の群れは攻撃すらも美しさを求めている。攻撃すら見とれるほどの舞いを。散るときも美を飾る。攻撃されている曾良君すらその美と儚さ潔さに一瞬だけ目を奪われる。

美は、人を時として無力化する。曾良君は美や風情に人一倍敏感だ。悲しいことに、私が君の長所だと伸ばしていったところが、今回の命取りになったのだ。

「蝶よ、弟子を、斬って」

ただし死なない程度でお願いします。

蝶は弟子にぶつかって塵となり、微弱ではあっても確実に痛みを与えた。それが幾重も積み重なれば、相当重く来る。

曾良君は、この攻撃を受けて、すでに戦意喪失してくれた。曾良君ほどの子なら、この程度を全部受けてもまだ立ち上がれるくらいと思っただけ、意外とあきらめが早くて助かった。でもこの戦闘で総じて私のほうが救いようもないくらいボロボロってのはなんか納得いかないです。

弟子は壁に背を預けてぐったりしていた。力が抜けていて、疲労

がたまっている。日頃のストレスとか過労が一気に出てたのか。大いに助かるけど。

「さすがは芭蕉さん。腕はなまっていませぬ。それどころか……僕が最後に見た時よりずっと磨かれている」

「そりゃ、だてに君の師匠じゃないよ。死ぬまで現役だからね」

「迷惑なんであと三年ほどで引退をお勧めします」

「ひどい！」

辛辣すぎるよ！ 芭蕉さんはいつだって元気な現役だもん。

私は、ずっと手を差し伸べる。いうことは、一つだけ。

「帰ろう、曾良君」

弟子は、素直にこの手を取った。

「はい、芭蕉さん」

十六、ひとりだち（後書き）

やっとひと段落ついたー！！ 細道組のほうは一応解決。残りはヒューズケン君ですな。がんばるぞう。

十七、空虚な風が吹く（前書き）

このお話は、『ギャグマンガ日和』のキャラ達を『東方』の世界に組み込んだパロです。閲覧の際はご注意ください。

十七、空虚な風が吹く

先日、ペットとして預かっていた空……もとい、河合曾良が、元の場所へと戻っていった。

記憶を取り戻すまでの間は玉霊殿で世話するという約束の元だったから、記憶を取り戻した曾良がここから離れるのは当然のことだ。……といっても、その記憶だって今の今まで失いっぱなしだったのかどうかさえ怪しいのだけだ。

僕の力は、人の心を読むという力。左胸に浮かぶ第三の目が心を見るのだ。ところが曾良にはそれが通用しなかった。いくら目をこらしても、心が霧に包まれて読み取れなかった。記憶を失っていたときからずっとそうだったけど、ある日を境にいきなり晴れた。たぶん、あれが記憶を取り戻した証拠だったんだと思う。

なににせよ、曾良が元いるべき場所へ戻ることができたのはいいことだ。僕が楽園に来たのも、曾良を帰すためでもあった。本来遂げるべき目的は、いまだに果たせずにいるけれど。

玉霊殿には、驚くほど人が訪ねてこない。別にそれでもいいと僕は達観するようになってきた。ここにいれば何もしなくて済むし、迫害の心配もない。庭に植えた野菜で食べていけるし、それ以外の食材は曾良が気を聞かせて持ってきてくれた。

曾良がいなくなってからというものの、僕の生活はまた元に戻った。

それだけなのだ。いつの間にか居ついたペットが、いつの間にかいなくなっていたというだけの、それだけのこと。

だけど、ペットと過ごした時間というのは思いのほかなじんでいたようで、最近の僕は退屈を余計に感じていた。なんというか、胸

にぽっかりと穴が開いて、そこに風が吹き通るような感覚だ。

退屈というより、空虚というのか。一人でいる時間は何も考えずにぼんやりしていて、楽でいいけれど、物足りなさを同時に覚えるのも確かだった。

原因は曾良がいなくなったこともあるが、確信あるのはもう一つ。自称普通の海軍軍人、コンテーがやたらとこちらを訪ねてくることだ。

玉霊殿に訪ねてくる人は、食材や料理を届けに来てくれる曾良と、コンテーしかない。そのコンテーは、かなりの頻度で特に何の用もなしに扉をたたく。何がしたいのか、さっぱりだ。心を読もうとすると、その大きな手で第三の目を覆い隠す。こっそりのぞいてやるうかところすと、魔法の類が何かで隠されていた。こういうことをする人はいが下心を抱えているものだけ……
その心も隠されているんじゃないか、自分で考えて予想するしかない。

「あれ」

今日もコンテーは昼下がりにぶらりとやってきた。特別悪い人ではないのは分かっているし、玉霊殿はあくまで来る人拒まずだから、中に上げる程度のことはする。

紅茶を一口すすると、コンテーはそう漏らした。

「なんですか」

「今日のは、茶葉が違っ」

「よくわかりましたね」

「毎日通えば、いつも出される味も覚えます」

「なるほど」

「そういえば、あなたはちゃんと食べてるんですか？」

「突然何を……。食べてますよ。庭で野菜を育てていますし、曾良

がいろいろと持ってきてくれるので」

「そうですか」

紅茶の話からいきなり僕の食事情とは。何をたくらんでいるのか。太らせて食べる気が。

じつと目を凝らして心を読もうとしたが、先を読まれたらしく第三の目を手で覆われた。

「それ、かなり怖いので」

「やましいことがあるから？」

直球で聞いてみる。コンテーはあわてるそぶりもせず、苦笑する。「やましいことがあってもなくても、心を読まれるのは誰にだって恐怖ですよ」

「あるんですね？」

「ないわけではありません。ただ、あなたに知られて嫌われるのが怖いのです」

「……ますますわかりません」

「それでいいんですよ」

コンテーは僕の頭を撫でた。当然、空いている手のほうで。

そういつやりとりがずっと続いたからか。

ある日、コンテーがこの屋敷を結局訪れなかったということがあったとき、僕はその時、強い空虚感を覚えた。

十七、空虚な風が吹く（後書き）

やっと主役二人にスポットあたりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7802v/>

玉靈殿日和

2011年12月16日18時53分発行